

提言 ～今、学校に求められるもの～**キャリア教育と取り組む意味：社会性の発達を促す**

筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 渡辺三枝子…………… 1

発信**特集** キャリア教育

- キャリア教育についての理解 教科教育チーム 指導主事 小野田義和…………… 6
 中央研修報告(進路指導講座)
 「将来にわたって生きていく力を育てる」 福島市立西根中学校 教諭 大木 修…………… 8
 「キャリア教育を推進するために」 県立あさか開成高等学校 教諭 菅野多美子…………… 10
 講座紹介 12
 外部講師の講演から 13

連載**学校評価**

『学校経営・運営ビジョン』と「目標の連鎖」について 学校評価研究チーム…………… 14

教員ネットワーク「教員ネットワークに参加して、指導力の向上を目指してみませんか？」
情報化推進研究チーム…………… 16**授業に生きる資料**「手軽に準備できる家庭科の実践的・体験的学習」
教科教育チーム 指導主事 黒川 佳子…………… 18**学校教育と組織マネジメント**

「ビジョンに基づく教育におけるPDCA」 教科外教育チーム…………… 20

情報モラル指導を推進しよう

「情報発信に伴う責任について」 情報教育チーム…………… 22

実践 学校教育相談

「教育相談の手法を取り入れたLHRでの『人間関係づくり』の取組み」 教育相談チーム…………… 24

豊かな教育実践

論理力を育てる

～論理力育成に関わるマトリックスの作成と授業の工夫～

福島市立蓬萊小学校 教諭 佐藤 志学…………… 28

子どもたちが学級に満足し、所属感を深めるために

原町市立原町第一小学校 教諭 村上 潤一…………… 30

中学校社会科において、思考力・表現力を育てる授業の工夫

～日常の授業に討論を取り入れた学習活動を通して～

棚倉町立棚倉中学校 教諭 根本 顕治…………… 32

作業的・体験的な学習を通して、地理的な見方・考え方を育てる

学習指導の在り方 ～身近な地域の調査において～

いわき市立小名浜第一中学校 教諭 山崎 浩之…………… 34

おしらせ

実践に役立つ教育資料 ～最近の研究紀要・資料から～ …………… 36

福島県教育研究発表大会の案内

提言



キャリア教育と 取り組む意味： 社会性の発達を促す

筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

渡 辺 三枝子

I キャリア教育をめぐる現状

「キャリア教育」が中央教育審議会で提唱されたのは平成11年である。当時私はキャリア教育がこれほど注目され、学校現場の活動に影響を及ぼすようになるとは予想していなかった。キャリア教育という言葉が社会の中に急速に広がったのは、児童生徒、保護者、教師たちからの必要性が叫ばれたからではない。むしろ、平成16年に内閣府を中心として4つの省の大臣からなる会議で提唱された「若者自立プラン」がきっかけである。言い換えれば、過去1年の間に、経済界・産業界、さらには地域社会が、若者の自立を促進するために、キャリア教育が有効な政策であると評価し、学校で実践するように要請してきたというのが現実であると思う。したがって、教師や保護者の間にはその必要性や意義を納得できないでいる人も少なくないのは当然であるかもしれない。

直接、児童生徒の教育に責任を持つ教師は、キャリア教育を他人事として済ませているわけにはいかない現実におかれている。今では、キャリア教育に無関心でいるわけにはいかないのであるから、「主体的に」取り組み、積極的に教育活動に生かすことが教育の

プロとしての教師のみなさんの社会的責任であり、学校教育の真の存在意義を社会に知らしめる絶好の機会ではないかと考えている。

そこで、本稿では、キャリア教育についての理解を深めていただき、学校現場で積極的に取り組む意味を述べさせていただきたいと考える。

II キャリア教育が求められた背景

新しい言葉や概念が一度流行してしまうと、「それはどういう意味ですか？」と改めて質問するのは困難になり、自己流の解釈で用いられるようになる。その結果だんだん本来の意味から離れてしまい、さまざまな衣を着せられ、最終的には混乱だけが残るということも起こりかねない。「キャリア教育」の場合、「キャリア」と「教育」という誰でも知っている単語から成っていることも手伝って、かなり多様な意味で解釈されていることは確かであり、混乱が危惧されだしている。さらに、キャリア教育の名の下で、5日間の就業体験（キャリア・スタート・ウィーク）とかインターンシップの実践が奨励されだしているため、キャリア教育の意義を理解する間もなく、「いつ、どこで、どうやって」と、実施計画に話題が集中しだしているのが現状であ

る。忙しい教師は「まずは実践してみよう」と思われることが多いが、実践し始めると、「これでよいのか」という不安、「今でも忙しいのに、これ以上また新しいことをしなければならぬのか」、「進路指導とどこが違うのか?」という不満感や不全感が募る結果を招くことになるからである。

教師が自信を持って教育活動の実践に取り組むためには、その活動の必要性や意義、目標を、具体的かつ正確に把握することが不可欠である。キャリア教育についてもしかりであると思う。そこでまず、キャリア教育が求められるようになった背景を把握することでその意味を考えてみたい。

最近では、「キャリア教育」は「フリータとニート対策」という説明を、何の疑問も抱かず受け入れている人が多いことに驚く。フリータとかニートという現象は、単一の原因で引き起こされたのではなく、最近の社会・経済的問題が複数重なり合った結果であるから、学校教育だけで対処できる問題ではない。そもそも学校は産業界や社会の問題への対応に追われていては本来の機能は果たせなくなる恐れもある。ちなみに、キャリア教育が紹介された平成11年時点には、フリータという言葉はかなり広まっていたが、ニートはまったく使われていなかったことを指摘したい。

もちろん学校教育は社会の問題に無関心であっていいというのではない。社会の問題に対して対症療法的な対応をするのではなく、その社会問題化されている事柄を通して、われわれ教育関係者は、「児童生徒が真に何を必要としているか」、「学校教育として、何をなすべきか」を自問し、教育を見直し、児童

生徒を育てるということで、社会の要請に応えるべきではないかと思う。

実は「キャリア教育」は、児童生徒の成育環境の急激な変化と、彼らが将来生きていく社会環境の変化の方向性に鑑みて、「若者の学校から社会への移行の困難さ」にもっと関心を払う必要があるという、若者に対する心配が背景にあるということである。言い換えれば、今の生徒たちが将来、一人の大人として生きる社会は、個々人の自己責任を問う社会となっていくことは明らかであるという前提にたって、学校教育は「生徒一人一人が、将来、自己責任の取れる自立的な社会人となるための基礎づくり」に積極的に貢献する必要があるという理念が背景となっている。

学校現場が、社会や産業界との関係を意識するのは進路指導のときであった。しかし、その進路指導で「生徒一人一人が将来、社会のなかで積極的に生きていくことを視野に入れた援助」をしていたかということ、疑問が残る。やはり「卒業後の行き先」を決めることに集中していた。もちろんそのような指導は今でも、これからも非常に重要である。しかし、行き先を決めても、すぐやめてしまっただけは何もならない。また、すぐやめる理由として、「自分の好きなこと、興味のあることができない」ことが一番多いとしたら、社会人としての成熟が遅れていることを意味する。進路を選ぶ援助・指導が、「選んだ進路先に適応し、生きていく力と態度を身につける指導でもあること」を軽視してきたことが、キャリア教育を求める背景にあることも事実である。

日本社会の変化がいっそう激しくなると予想される現在、将来の若者、将来を担う若者

の成長・発達を促進させることを目的とする学校教育は、従来以上に、「社会との連続線状にある学校生活」、「社会への移行の準備段階にある学校」を認識して、学校教育の果たす役割を考えなおす必要性がキャリア教育を生んだともいえるであろう。

Ⅲ キャリア教育の意味

すでに指摘したように、「キャリア教育」は、「キャリア」と「教育」という耳慣れた言葉から成っているため、改めて「キャリア教育の意味」を追求する必要性があまり感じられないようである。その代わりに、語感から、将来の就職に有利な教育活動とか、キャリア組に代表されるエリートを育てる教育とか、進路指導の新しい呼び名とかとさまざまな解釈が流布しだしている。

しかし、キャリア教育は、「キャリア」および「教育」についての世間一般の解釈をつなぎ合わせただけでは正確な理解にはたどりつかない。キャリア教育は新しい「概念」なのである。文部科学省の「キャリア教育の促進に関する総合的調査研究協議会」が設置されたとき、「キャリア教育がなにを意味するかを明らかにしない限り、どんな立派な計画やプログラムができていようと砂上の楼閣になりかねない」という意見で一致し、その後報告書にまとめるまで、多くの時間を「意味の明確化とその背景にある考え方の明確化」に費やした。幸い、報告書にまとめられた「意味」がその後のキャリア教育の施策の基礎となっている。報告書を公表してすでに1年以上がたったが、今でも、実践にむけての議論を重ねていく過程のなかで、キャリア教育の背景

となる理論の検討とあわせて、その概念をさらに明瞭化することに努力している。ではキャリア教育の概念を紹介してみたい。

「キャリア教育」とは、一言でいえば「教育改革の理念」であり、「教育改革の方向性をしめす視点および方針」をさす概念である。決して、特定のプログラムや教育活動を意味するものではない。

過去60年の間だけでも幾回の教育改革がなされたかわからないほどである。その時代時代で改革を要請とした背景が異なり、その理念も異なったことは周知のとおりである。現在も多様な視点から教育改革が叫ばれ、取り組まれている。したがって、教育改革といってもそれがよって立っている理念や視点によって、改革の内容も目標も異なることを指摘しておきたい。

「キャリア教育」という概念が提示する教育改革の視点とは、「『キャリア発達』という視点にたつて、教育の現状を見直し、児童生徒一人一人のキャリア発達を促進させられる方針」で、教育全体を改革しようとするのである。

報告書の文言を引用すると、「児童生徒一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、従来の教育のあり方を広くみなおし、改革していくための理念と方向性を示すものである」(p. 8)となる。

この意味を理解するのは決して容易ではないと思われるであろう。そのとおりである。なぜなら、今まで、キャリア発達を促進させるという視点で教育活動を行ってきていない人が多いからである。実は、進路指導の定義と目標はキャリア発達を背景としているので、まったく馴染みがないとはいえないので

あるが、それをご存知の人は決して多くないので、耳新しい概念と感じられることは不思議ではない。

読者の方々は、「知的発達とか情緒的発達、身体的発達、社会的発達ということばなら知っている」といわれるであろう。教師の仕事を支える学習指導要領とかカリキュラムはこれらの諸側面の発達をうながすことと切り離せないこともご存知だろう。キャリア発達も全人格の発達の一側面なのであり、児童生徒の知的、情緒的、社会的等発達と相互に影響しあっている。しかし、学校ではほとんど注目されなかった側面である。キャリア教育を通して、キャリア発達という側面に光を当て、従来の知的、情緒的、社会的、身体的発達と一緒にキャリア発達を促すことの重要性に気づいてもらいたいということである。

キャリア発達を理解するためには「キャリア」という言葉の意味が鍵である。「キャリア」とは、簡単にいえば、一人一人の『人生航路』ということである。別の言い方をすれば、「生涯の各年齢段階で、個々人が自分なりに、さまざまな仕事（職業とは限らない）にかかわることで、さまざまな役割を果たしていく結果として築かれる個々人の独自の生き様」という意味である。そこで、キャリア発達とは、「個々人が自立した社会人として、自分のキャリア（人生）を主体的に築いていけるようになるためには、いろいろな能力や態度、価値観、知識が必要であり、それらの能力や態度、価値観、知識などは、段階的に発達させられなければならないし、生涯発達し続ける」という理念である。

日本の教育界だけでなく社会全体も、人間は知的側面さえ発達させれば、おのずとその

他の側面（社会的、情緒的、キャリア）も発達すると思いついてきたのではないだろうか。

「あんなに頭がいい子なのに、なぜあんな事件を起こすのだろうか」という言葉を耳にするたびに、そう思わずにはいられない。しかし、身体的発達がそうではないように社会的発達、キャリア発達は知的発達で置き換えられないのである。もちろん相互に影響しあうものではある。将来自立的・主体的に自分の人生を生きようになるためにはキャリア発達が不可欠なのである。

キャリア発達は「仕事とかかわることをとおして・・・」と述べたが、「仕事」は職業とは限らないことを指摘しておきたい。年齢によって仕事の内容は異なる。職業人にとって仕事は職業が中心かもしれないが、ボランティアも含まれる。児童生徒にとって、主な仕事とは「学ぶこと」であることを忘れないでいただきたい。したがって、児童生徒は、学校という生活の場で、学ぶという行為、学ぶという仕事とかかわることで、さまざまな役割を果たしていくことで、児童生徒としての自分の人生を築いていけるようにすることがキャリア教育であるということもできる。

Ⅳ 「生きていく力」を育てる

「キャリア教育」は「生きていく力」を育てる教育と言い換えることができる。われわれ教師は、学校が児童生徒にとって主な生きる場（人生を送る場）であることを認識しているだろうか。児童生徒は学校で大半の時間を過ごすし、そこで自分の存在価値を経験する。したがって、学校は彼らにとって人生を送っている主な場なのである。そう考えると、

児童生徒が学校で生き生きと生き、自分の存在価値を経験できることが将来自立的に生きていく基礎となることはうなずけるであろう。

教育改革の理念としてのキャリア教育は、職業について教えたり気づかせたりするというよりもむしろ、一人一人の児童生徒が、学校という場を生かして、「生きること」を体験しながら、さらに「生きていく力」を促進していくように援助することが将来どんなに意味のあることかを考え直してみることはないかと考える。

このような視点から、「生きていく力を育てる学校」に焦点をあててキャリア教育の意味を考えてみたい。

1 「働くこと＝学ぶこと」の意味

児童生徒にとって、主な仕事は何であろうか。彼らの日常生活において「働く」とは何を意味するのであろうか。生涯発達心理学の理論家であるエリクソンという学者は、児童生徒時代を「学ぶ存在としての自己を経験する時期」と名づけた。学ぶことで自己評価がなされ、自己の存在を経験し、学ぶことで喜びや悲しみを経験するのである。彼らにとって、学ぶという行為がその時代の全人生に影響を与えるので、学ぶことに生産的に関わることが発達の課題なのである。彼らにとって「働くこと＝学ぶこと」なのである。将来自立的に社会人として職業生活を生きる土台として、児童生徒にすべきことは、さまざまな体験を通して、学ぶ楽しさ、学ぶ意義をみつけ、学ぶことへの挑戦をすること、学ぶことで将来の可能性を広げる力を獲得することであると思う。学ぶことの意義を認識する

ことが、キャリア教育の意味ということもできるであろう。

2 社会性の育成

学校は、「学ぶことを通して自己を築く機会に満ちている場」とすると同時に「社会性を育成できる最高の場」である。「人間が集まって行動生活を営む際に、人々の関係の総体がひとつの輪郭を持って現れる集団」（広辞苑）を社会ととらえるとすると、学校、学級はまさに最も身近な社会なのである。もちろん児童生徒は学校以外にも「家庭」や「地域」という社会にも同時に生きているが、学校は将来大人として自立的に生きる環境としての職業界や社会と最も類似している社会なのである。

学級のなかで繰り広げられるさまざまな活動は、学級内の人間関係のなかで繰り広げられているのである。社会性とは単に仲良しになるとか、知り合いになれることをさすものではない。多様な背景と個性を持つ人々が集まって共同生活をするものの意義と困難さを認識するところから始まると思う。学級生活を生き生きと生きていく過程で、その後のより複雑な社会に生きる力を体験的に習得できるはずである。教師は授業および学級活動を、社会性を育成できる場として活用できることを認識して、児童生徒に働きかけることでキャリア教育が実践できるであろう。

渡辺三枝子先生の講演を聴講してみませんか？

平成18年2月7日(火)、2月14日(火)の2回、渡辺三枝子先生が「キャリア教育の在り方」と題して講演を行います。（高等学校経験者研修Ⅱ 講座番号K16）

聴講希望の方は、「聴講申込書」に必要事項を記入し、1週間前までにFAXまたは郵送で申し込んでください。詳しくは、教育センターのWebページをご覧ください。

キャリア教育についての理解

教科教育チーム 指導主事 小野田 義 和

1 はじめに

ここ2年ほど「キャリア教育」ということが国の関係省庁・関係機関をはじめとして、地方の教育委員会の推進事業として全国的に扱われています。難しい話はさけますが、キャリア教育とはどのようなものなのかを考えてみましょう。そのためには、まずその社会的背景から探っていく必要があります。

90年代初めのバブル経済崩壊以降「失われた10年」と表現するほどの大きな変化がありました。企業の活動を見ると、それまでの「年功序列」「終身雇用」に代表される日本型の雇用形態から、雇用の多様化を図ることで、利益を維持しようとする企業。その一方で、規制緩和等の流れに乗って、市場開拓や新しいサービスの提供により、利益を拡大したケースも多いといわれています。「成果主義」に邁進する動きも見られるようですが、その反動が起きていることも事実です。経済に明るい一面が見えてきた今日ではありますが、雇用形態の多様化を従来型の雇用形態に戻すことは全体的には難しそうです。

こうした経済・社会の変化の中で、今までは大きく取り上げられることもなかった「フリーター」がその数の増大とともにクローズアップされ、そのうち「ニート」と分離してともに議論されるようになりました。また、欧米にも見られないほどの急速な「少子・高齢化」社会の到来が予見されており、大きな課題として取り上げられています。こうした諸問題に共通して見られる点は、ともに労働市場の問題になると考えられています。それ故に、ニートなどの問題をまったく学生・生徒本人の問題に帰することができないことも事実でしょう。

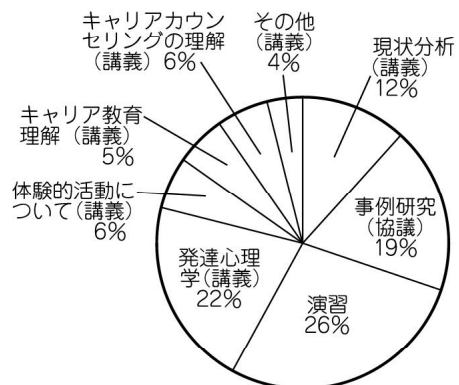
過去にさかのぼって考えてみると、高度経済成長期には、地方から一部の都市へたくさん

安い労働力が供給されると同時に、ムラ社会的な文化・生活様式が企業の中に醸成され、それが社会的交流の一つの場となってきました。前に述べた社会的変化はそうした枠組みさえ壊そうとしているとともに、学校という一つの社会の中でもそのような現象が起きているとさえ思われます。良い大学を出てそれに見合う企業に就職していけば、良い暮らしが保障された時代は終焉し、これまで以上に自分で考え、自分で生き方を選択しなければならない時代に来ています。学習指導要領もそれができる人間の育成を目指していますし、キャリア教育が目指すものも同じ方向性をもっています。そのためどのような手立てが私たちに必要なかが問われているわけです。

2 中央研修を通して

昨年、「進路指導講座」とされていた講座が、「キャリア教育を推進するための指導者の養成を目的とした研修（進路指導講座）」と名称とその内容が改められました。この研修の内容を知っていただければ、キャリア教育の目標等を理解していただけるのではないのでしょうか。下のグラフは、5日間の研修内容を時間配分の割合で示したものです。このうち事例研究は、各都

研修の時間配分について



道府県の小・中・高を通した進路指導の状況についての研究協議であるので、現状分析に入れてもよいでしょう。そうすると、現状分析、発達心理学の理解、演習の3つの分野に多くの時間を割いていることが分かり、この研修プログラムの方向性が現場を重視した内容であることがうかがえます。特に演習で実施された内容は、従来の進路指導がガイダンス中心に行われていたことに鑑み、不足していた部分を身に付けるべく行われたものです。その柱がコミュニケーションスキルでありキャリアカウンセリングの考え方であったわけです。詳しい内容は、別に譲るとして、今まで行っていた面接の手法が生徒たちにとって妥当な方法であったのかという反省になり、学校の進路相談の現場では大いに役に立ちました。

3 学校現場で生かすには

特別な時間を設けてキャリア教育に関する講座を準備してもよいかもしれませんが、それではガイダンスのみで、実績をつくることに終始してしまわないかがむしろ心配です。キャリア教育の趣旨は、教育活動全体を通して行うとされているので、一日のうちで最も時間を割いているのは何かを見直してみれば、授業であることに気づきます。授業の見直しはこれ以上無理だと考える前に、授業で扱う教材の中身が、社会とどのようにつながっているのかという視点を加えるだけでも違ってくるのではないのでしょうか。

例えば、会社経営について授業で取り扱うにしても、単に物を売るだけにとどまらず、会社の立地や客層、仕入れや販売、従業員の雇用、接客態度等の様々な要素を考えて、これまで学習してきた内容と何らかの関わり合いがあることを分らせることができるでしょう。スポーツの分野であれば、その選手のみに興味関心を向けるだけでなく、それに関する仕事まで広げて考えさせてみるとどうでしょう。スポーツド

クター、トレーナー、グラウンドキーパー、鍼灸師、用具の研究開発、高齢者向けの指導者、栄養士など、かなりの広がりを持っていることが、生徒たちには分かるに違いありません。もちろん、それに関わる仕事は、付随する様々な技能や知識も要求されることを、私たち教師は多面的・多角的に勉強しておくことが必要になります。

また、授業や部活動時における開始や終了のあいさつや、いわゆる「報・連・相」、清掃活動等が、教育の一環としてだけでなく企業や私たちの社会生活のなかでも当然のこととして行われています。そうした活動や相手に対する配慮や言葉遣い（もちろん児童生徒に対しても）が、どのような意味を持っているのかをもう一度生徒たちに確認させていく必要があるのではないのでしょうか。そのためには、まず教師として社会人として持ち駒を多く持っている必要があります。教師一人一人の力は小さくとも教材研究や生活指導の一環としてそうした視点や活動を少しずつ取り入れていくようにすれば全体としてしっかりとしたキャリア教育が構築されていくに違いありません。

4. おわりに

「社会人・職業人の一人である教師がその仕事がつまらないと思うのであれば、それを子どもたちは真っ先に感じるのではないのでしょうか。」とは、研修講師のことばでありました。一日のうちの大半を過ごす学校において、できることはたくさんあるのです。いずれは社会に出て、人間対人間の関係の中で生きていくということを前提とすれば、学校という集団生活の中で身に付けなければならないことは、情報端末などの操作が上手になることだけではないはずで、様々な課題がある今日であるからこそ、人間関係形成・情報活用・将来設計・意志決定の4つにまとめられた能力を育成していく必要があるわけです。¹⁾

注 1) 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～
参考1 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)を参照。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/007.pdf



将来にわたって 生きていく力を育てる

福島市立西根中学校 教諭

大木 修

1 はじめに

もう10年以上前のことになるだろうか。ある先輩が私にこのような話をした。

「先生は生徒といつまでつきあおうと思ってる？ 中学校3年間でさよならだと思ってつきあうのと、その後もずっとつきあおうと思っているのでは、生徒に対する働きかけが変わってくるよ。」

先輩は、子どもと友達づきあいをしろと言ったのではない。子どもを本当に教育しようと思うのなら、3年間で「はい終わり」という考え方ではいけないと教えたのだ。私は、頭を殴られたような気持ちになった。中学校卒業後の生徒のことなど思いめぐらす余裕もなく、無事卒業させることをゴールにして一日一日を過ごしていたからである。

私は、キャリア教育について学んでいく中で、キャリア教育とは、子どもたちが将来にわたって生きていく力を育てていく教育なのだと思うようになってきた。

2 進路指導からキャリア教育へ

近年、文部科学省のみならず、国全体で推進しているキャリア教育は、従来の進路指導とどう違うのであろうか。

この点について、日本のキャリア教育の第一人者である仙崎武氏は、村上龍氏との対談の中でこう語っている。

二つは本質的には同じで、職業的な自立や、社会人としての資質を養うといった目標を達成するための指導が、進路指導でありキャリア教育だ。

しかし、進路指導はいつの間にか理念や目標がすっ飛んで、多くの中学校でどこの高校を受験・合格させるのかといった出口指導になった。

だから子どもは小学校から高校まで1万2千時間も学校で過ごしているのに、「将来の生き方や自分に向けた仕事がわからない」と言う。

そこで、もう一度本来の教育の原点に立ち戻るために、「キャリア教育」という新しい概念が打ち出された。

【VIEW21(中学版)】(2004年9月号、Benesse)から
下線は大木による。

進路指導とキャリア教育は、本質的には同じだが、出口指導になってしまっている進路指導を、本来の教育の原点に立ち戻すために「キャリア教育」という新しい概念が打ち出されたというのである。

3 キャリア教育への展開

本来の教育の原点に立ち戻るために、どのように改善すればいいのであろうか。

私は、「個のキャリア発達」「系統化と組織化」「職業人として必要な資質」がキーワードであると考えます。

(1) 個のキャリア発達について

出口指導になってしまっている進路指導とは、卒業時の個人の能力や適性に依拠して、いかに入れる進学先、就職先を見つけるかという指導であるといえるだろう。

これに対して、キャリア教育は、児童生徒一人一人のキャリア(=個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積)発達を支援する教育である。¹⁾

このことから、児童生徒が職業を具体的に・現実的に理解することを通して、自分と働くことを関係付け、働くことの価値を見出すために、職場体験やインターンシップ、社会人

・職業人による講話、職業調べなどの調査活動等の体験活動が重要になる。また、キャリア発達は、一人一人の中で進むものであるから、キャリアカウンセリングが、意図的・計画的に実施されなければならない。さらに、一人一人のキャリア発達を確かに見取るために、児童生徒の諸活動における記録を累積し、児童生徒自身が振り返ることによって自己理解を深めることができるようにすることも大切であろう。

(2) 系統化と組織化について

キャリア発達の支援のために、小・中・高の発達課題を明らかにして、一人一人の児童生徒に対するそれまでの教育活動とそれ以降の教育活動を見通し、系統的に教育活動を展開する必要がある。

また、特別活動、道徳、総合的な学習の時間、そして各教科の学習の有機的な関連を図り、学校の教育活動全体を組織することが大切である。

(3) 職業人として必要な資質について

若者の離職について、「7・5・3」といわれる状況がある。中学校を卒業して3年以内に離職する割合が7割、高校卒業後が5割、大学卒業後が3割だということである。離職する理由としては、人間関係をうまく築けないことが最も多い。

このことから、キャリア教育では、「4つの能力」として、主に進路選択にかかわる情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力とともに、自他の理解能力やコミュニケーション能力などの人間関係形成能力の育成が重視されている。

以上(1)～(3)の内容をふまえて、各学校が保護者や地域と連携・協力して、具体的に取り組むことが望まれる。

4 たくましく生きていく力を育てる

職場体験学習を終えた後のアンケートで、「自分が希望する職業ではなかったの、楽しくなかった」という生徒の感想を読んだことがある。

キャリア教育は、職業についての夢や希望を

持たせ、その実現に向けて努力していく子どもを育てる教育である。そして、それは正しく大切なことである。

しかし、自分の夢や希望通りに進路を実現する生徒は、どのくらいの割合なのだろうか。また、仮に希望通りの進路を実現したとしても、実際に職業についてみて思いもよらない仕事をすることはよくあることだろう。あるテレビ番組で、「適性は、実際の仕事に取り組んでいく中でつくるものです。」と話していたサラリーマンがいた。

もし自分の希望することでもなくとも、直面した境遇の中で最大限の努力をするということも必要なのだということ、教師は生徒にしっかり伝えていく必要があると思う。

キャリアは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と定義されている。働くことを労働に限定することなく広くとらえるとともに、立場や役割に対して責任をもち誠実に取り組む中で価値を見出す力を育てたい。²⁾

キャリア教育は、すべての子どもにとって必要なものであり、夢や希望を追い求め、たとえ厳しい現実と直面しても、それを乗り越えて自分らしくたくましく生きていく力を育てる教育であるべきだと考える。

5 おわりに

本稿は、「進路指導講座」で学んだことをもとにして、キャリア教育についての私見を自由に述べさせていただいたものであり、不十分な点が多々あると思われる。キャリア教育推進の指針については、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』に総合的かつ具体的に整理されているので、まずこれをしっかり読んで理解することをお勧めしたい。

本稿が、先生方のキャリア教育理解のたたき台となれば幸いである。

注 1) 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』(7ページ)を参照。

2) 心理学者フランクルは、その著作で「どんな時も人生には意味がある。なすべきこと、果たすべき意味が与えられている。」と述べている。



キャリア教育を 推進するために

県立あさか開成高等学校 教諭

菅野 多美子

I キャリア教育の出発点

フリーターやニート、早期離職など、学校を卒業してから社会との接続がうまくいかず挫折してしまう若者が増加し、社会問題となっている。そこで、学校で職業観・勤労観を育成し、「学ぶこと」と「働くこと」を結び、「生きる力」を育成することを目的としたキャリア教育が求められている。小学校におけるキャリア教育は新しい取り組みであり、中・高では進路指導からキャリア教育への転換である。キャリア教育のキーワードとして「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」が挙げられる。このキーワードの育成を目指した各学校の取り組みからキャリア教育が始まる。

II キャリア教育の指針

1 発達の視点

(1) 発達段階にあった発達課題

人間関係形成能力の一つにコミュニケーション能力があるが、それは突然身に付くものではない。幼少期から青年期にかけて、「ありがとう」が言えること、友達の気持ちや考えを理解しようとする、他者への配慮や新しい人間関係に適應すること、さらに異年齢の人とのコミュニケーションが図れるようになることなど、成長の過程で育成し獲得していく能力である。適切な時期に適切な課題を達成することによって発達が促され、キャリア発達に関わる4つの能力が育成されることになる。小学生には小学生の、中学生には中学生の、高校生には高校生の課題と育成すべき能力や態度がある。育成しようとする能力を明確にし、課題達成の指導計画を立案することが重要である。

(2) ねらいの明確化

特別活動の学級活動・ホームルーム活動や学校行事、また、総合的な学習の時間の中に勤労観・職業観の育成に関する項目が位置づけられている。文化祭や様々な行事も、組織作りから成功に向けてのすべての活動には4つの能力が関連している。これまで行ってきた諸活動を4つの能力育成に関連付けた視点から見直し、意図的な行事としてねらいを明確にした企画にしていくことがキャリア教育になる。一方、教科・科目の学習の中でキャリア教育に結びつくもの、教科の学習が諸能力の育成を促すものも多い。教科を含め、すべての教育活動の中にキャリア教育の視点を入れることもこれからの課題である。

2 連携

(1) 小中高の連携

キャリア教育も、教科と同様に、校種間の連携を図り、連続性を持たせたい。中学校と高校、小学校と中学校を連携させることで、子どもの学習・体験を継続することができる。それぞれの学校をつなぐプログラムを作成することが必要である。

学習と成長の過程がわかるポートフォリオを作成することは一つの方法である。卒業した学校で作成したポートフォリオを進学した学校で活用することができる。また、高校生が中学校で、中学生が小学校で講演をすることも考えられる。話をする生徒にとっては、自分が卒業した学校の学習を振り返り、現在の学校の学習の意義を見直す機会となり、話を聞く生徒にとっては現在の学習を将来に結びつけて考えることになる。それぞれの立場で経験と未来をつなぐことができる。

(2) 保護者・地域との連携

家庭で自分の役割を果たすこと、地域の人

々や行事に積極的にかかわることなど、キャリア発達は家庭や校外の活動で獲得されるものでもある。学校と社会を結ぶことは「学ぶこと」と「働くこと」をつなぐことになる。職場体験やそれに関連する様々な企画を実施する際には保護者や地域の理解と協力が必要になる。日ごろから学校の様子を地域に紹介したり地域行事に参加するなどの協力体制を整え、より良い関係を築くこと、そのための組織が連携をスムーズにする。

3 体験活動

(1) 発達に応じた体験

職場体験は生きる力を育て、学習意欲を高めるといふ報告がされている。職場で役割を果たす中で、自分の存在や価値を認めることができ、自信を持てるようになるからである。

体験は職場体験に限らず、その発達段階にふさわしいものがある。たとえば、小学校で自分の住む町を探検することや商店街を調査したり、働く人を調べることもキャリア教育につながる体験活動である。高校の職場体験は、より実践的で知識や技能を身に付けたり、社会的移行の準備段階として取組ませることができる。発達に応じて小中高で活動の焦点の当て方は変わり、それぞれの体験を積み上げる企画が望まれる。

(2) 事前事後指導

体験活動・職場体験は、入学から卒業までのキャリア教育の中に位置づける。自己理解、人生設計、職業理解などが職場体験の事前学習になる。一人一人が目的を持って体験に取り組めるよう、事前指導を充実させる。また、職場体験の後には、それぞれが自分の目的を達成できたかどうか振り返り、評価し、それを将来設計に反映させていく。さらに、報告会や発表などで他の体験や学びの多様性を知ることによって成長を促すことができる。また、お世話になった方々や職場に節目節目で報告をするなど地域社会とのつながりを継続することも重要である。入学から卒業まで、『事前指導→職場での体験→事後指導』が一連の職場体験である。

(3) 一人一人の成長

実際の職場体験では希望や期待がかなわない場合もあり、目標設定や振り返りにはカウンセリングによる一人一人への目配りが欠かせない。体験を通じた生徒の成長を見る視点も必要である。

Ⅲ キャリアカウンセリング

1 目的と重要性

キャリアカウンセリングは、依存しがちな子どもたちが問題を自分で解決し、自立に向かうことを目標としている。キャリア形成における迷いや不安を受け止め、気づきを促し、主体的な問題解決への積極的な支援をしていくものである。HRや休み時間など学校生活の中の様々な場面で相談を聴き、自力で解決できるように援助する。相談を待つだけでなく積極的に声をかけることもある。キャリアカウンセリングは子ども一人一人に向けられるキャリア発達への働きかけであり、未来に向けて「生きる力」を持てるように働きかけることでもある。

2 方法

キャリアカウンセリングは目的がある積極的な行為で、短時間で課題を明確にし、意図的なことばをかけなければならない。傾聴し、気持ちを受け止めながら、課題解決ができるように関わっていく。生徒に自由に話をさせるだけでなく、自分が感じている不安に気づき、課題を自覚し、意思決定できるよう、積極的に質問をし、情報提供をし、指示すること、宿題を出すなど面接以外の時間を有効に活用することも必要になる。

Ⅳ 意図的な活動へ

キャリア教育はすべての教育活動に取り入れられ、キャリアカウンセリングは生徒と関わるすべての場面に活かせる。キャリア教育の視点を持って生徒に接すること、ねらいを明確にした4つの能力の育成をめざした意図的な活動を行うことがキャリア教育を推進することになる。

講座紹介

教育センターでは、平成17年度、基本研修11講座・職能研修12講座・専門研修50講座を実施しています。

今回は、10月までに行われた研修の中から2つの講座の様子を紹介します。

小学校経験者研修Ⅱ

1班：9月5日～7日（70名参加）

2班：9月26日～28日（72名参加）

1 共通講義

今日的課題として、「評価を生かした学校マネジメント」「教育の情報化と情報教育」の2つの講義が行われました。

2 分科会（教科指導）

小学校経験者研修Ⅱでは、国語・算数・社会・理科から1教科、生活・音楽・図画工作・体育・家庭から1教科選んで研修を行っています。



各教科とも、持参した指導案等をもとに、授業改善に向けた協議や模擬授業を実施しました。

また、外部講師による講義や実習も行われました。

音楽では、武蔵野音楽大学講師の阿部いと子先生をお呼びして、「創造的な音と動きのワークショップ」と



題し、音楽遊びやボディパーカッションなどを取り入れた音楽づくりを体験しました。



図画工作では、福島大学教授の天形健先生をお呼びして、風船を使って石膏の卵を作り、造形活動のおもしろさを体験しました。

小・中・高等学校情報教育講座 （プレゼンテーション技法）

10月6日～7日（26名参加）

デジタル素材を活用した効果的なプレゼンテーションを行うための技術と指導力の向上を目的とした講座です。

1日目は、デジタルカメラの基本操作やDVキャプチャの方法を理解し、画像・動画をPowerPointに挿入する演習を行いました。その後、「グループ紹介」をテーマにプレゼンテーション作品を制作、発表しました。

2日目は、日本福祉大学教授の影戸誠先生を迎え、講義・演習を行いました。



「効果的なプレゼンテーションのための基礎」と題された講義では、「プレゼンテーションは聞く人のためにある」という視点から、説明がありました。

プレゼンテーションを支える3つの力

1 構成

伝えたいことを精選し、メッセージを明確にする。コンセプトマップを作成して全体を見通す。

2 ファイルの作成

1シート内の行数は4～5行、画像は1～2枚、動画は1分以内が適切である。

3 話す力

1分250字のスピードで話す。SあるいはZの目線で四隅に視点を置き、アイコンタクトをとる。質問を入れて主体的に考えてもらうとよい。

外部講師の講演から

教育センターの研修では、多くの外部講師をお招きし、講義・講演を行っています。
今回は、10月までに行われた研修の中から外部講師の方々を紹介します。
外部講師の講演は、聴講も可能です。詳しくは、教育センターの Web ページをご覧ください。

高等学校経験者研修Ⅰ(美術)

「イギリスの美術教育について」

筑波大学講師 直江 俊雄

イギリスのナショナル・カリキュラム (NC) は、アートを文化としてとらえてその文化を国民全体で共有しようとする配慮がいたるところに見られます。日本の学習指導要領(美術)と NC の特色を、比較しながら学びました。



高等学校経験者研修Ⅱ(家庭)

「家庭科における指導と評価」

文部科学省教科調査官 望月 昌代

家庭科は「生きる力」を育てる教科であることを踏まえ、子どもたちの変容を見る授業や「4つの観点」のバランスのとれた指導の重要性について、具体的に学びました。

教育相談実践講座

「生徒指導・教育相談の諸問題と対応」

早稲田大学助教授 本田 恵子

「いじめ」「暴力」が生じるメカニズムやその対応について、実際の指導場面のビデオ視聴等を通して学びました。



小学校算数専科講座

「教科の専門性を高めるための教材研究」

筑波大学助教授 清水 静海

国際的、歴史的な背景を踏まえ、算数の指導のあり方について学びました。今回は、特に「比の学習」に内容を絞り、実際に見ていた模範授業や、問題例を通して、具体的に指導していただきました。

『学校経営・運営ビジョン』と 「目標の連鎖」について

1 『学校経営・運営ビジョン』とは

学校評価は、各学校がその年度に重点的に取り組むべき内容を示した『学校経営・運営ビジョン』を掲げることから始まります。本県で定義した『学校経営・運営ビジョン』は、単に目標のみを示すものではなく、実施主体や手だて等を具体的に記載したものです。

(1) 活動の起点としての『学校経営・運営ビジョン』

『学校経営・運営ビジョン』には、学校の実態を踏まえた校長の経営方針、その年度の学校の実践の重点事項が構造化されます。そこから、校長の学校運営や、実施主体としての分掌組織の構築、そして一人一人の教職員の活動が実践されていきます。

学校評価というと、調査を行いまとめることに焦点が当てられがちですが、まずは、学校がその年度取り組むべき実践内容すなわち『学校

経営・運営ビジョン』の作成が必要なのです。

(2) 『学校経営・運営ビジョン』が含むべき内容

『学校経営・運営ビジョン』は、校長とともに、教職員の「協働」によって作り上げられるものです。図1に示されているように、『学校経営・運営ビジョン』には、教育目標、校長の経営方針、重点項目等が示されます。『学校経営・運営ビジョン』の中心は「重点項目」であり、各重点項目には、学校が取り組むべき具体的な手立てや到達状況を判断する指標が記載されます。

そのことから、『学校経営・運営ビジョン』は、教職員が同じ目標に向かって教育実践に取り組む、「協働」を促すための拠り所となります。そのため、学校の取り組みを評価する調査も、『学校経営・運営ビジョン』に掲げられた実践内容に対応した調査項目となります。

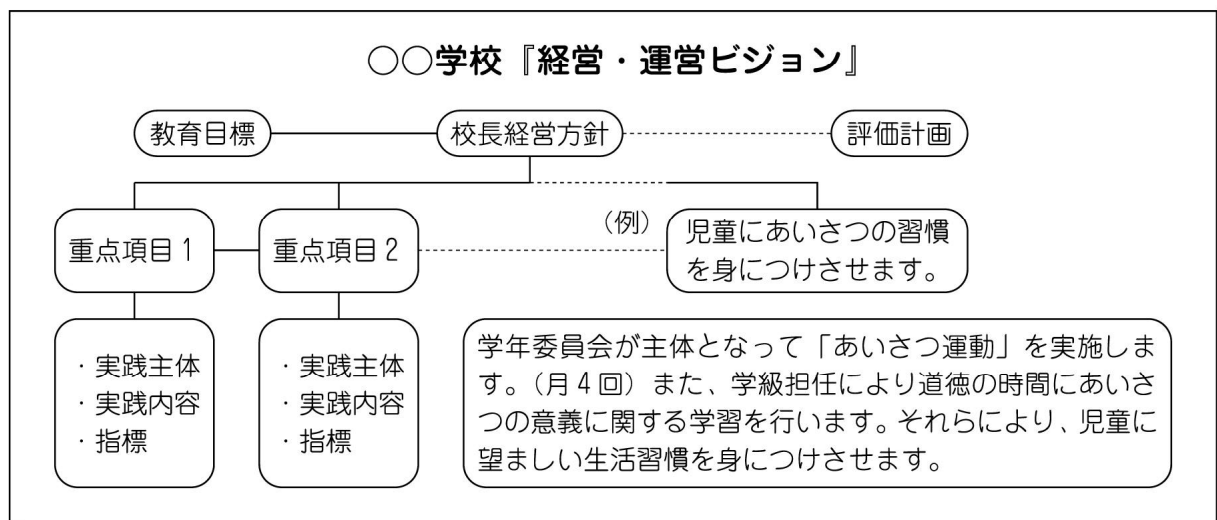


図1 『学校経営・運営ビジョン』の構造例

2 『学校経営・運営ビジョン』と「目標の連鎖」とは

学校の教育目標達成のために、その年度の活動の重点項目を示した『学校経営・運営ビジョン』に基づき、各部や学年等の分掌組織ごとに目標がつけられます。次に、分掌の目標を達成するために教職員個々人の行動目標が設定されます。図2に示されたような目標のつながりを「目標の連鎖」と呼ぶことにします。

(1) 目標の連鎖のための前提

分掌組織や教職員個々人は、『学校経営・運営ビジョン』の重点項目から、教科指導、教科外指導、学校運営等の目標を設定することが求められます。このことから、『学校経営・運営ビジョン』の重点項目は、組織や個人が目標を設定できるような内容であることが必要となります。

(2) 目標の連鎖による効果

重点項目を受け、分掌組織ごとに設定された目標をもとに分掌ごとの話し合いが行われ、職

員同士の協働を促進することができます。また、各分掌組織の目標を受けて、個人目標を設定することにより、学校運営への参画意識を高め、組織の一員としての自覚をもたらします。そのことにより、一人一人の教員の取組みを分掌ごとのチーム体制として機能させることができます。

(3) 校内研修会の活用

学校評価をすすめるにあたっては、校内で共通理解を図るとともに、教職員一人一人の自発的な取組みが必要となります。そのために、全体での話し合いと併せて、演習形式の研修会を実施することが有効です。

『学校経営・運営ビジョン』の作成や調査結果のまとめの際、演習形式の研修会を実施することにより、学校課題への理解を深めるとともに、教職員同士の活動を通して協働意識を高めることが可能となります。

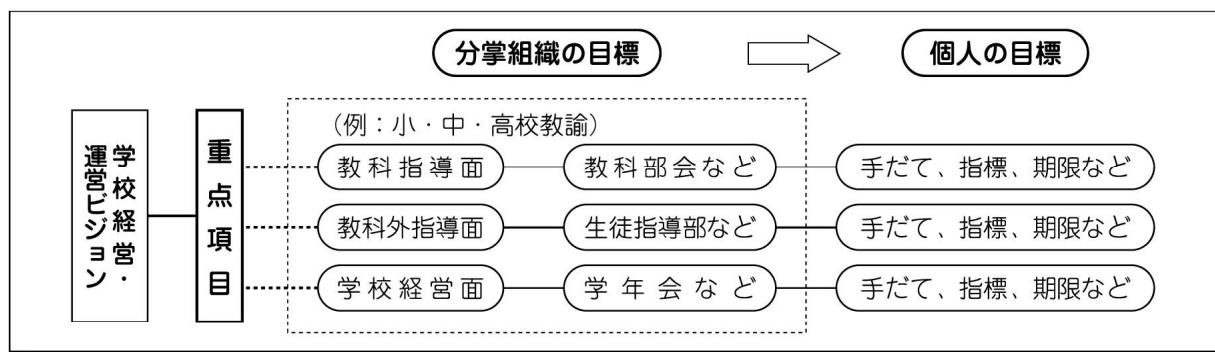


図2 『学校経営・運営ビジョン』を受けた目標の連鎖

3 年度末の『学校経営・運営ビジョン』更新の手順

『学校経営・運営ビジョン』による実践は、調査を通して成果や課題が明らかにされます。また、調査結果や学校内外の変化を踏まえて、『学校経営・運営ビジョン』が更新されます。更新の手順の概要は以下のようになります。

ア 『学校経営・運営ビジョン』の実施状況調査による成果と課題の明確化

イ 分掌組織としての反省事項と改善策の集約による次年度の『学校経営・運営ビジョン』(案)づくり

ウ 年度初めの校長の経営方針を踏まえた『学校経営・運営ビジョン』の再検討

エ 『学校経営・運営ビジョン』の学校内外への広報

以上の手順を経て『学校経営・運営ビジョン』は更新され、新年度の取組みが始まります。

情報化推進
研究チーム

「教員ネットワーク」に参加して 指導力の向上を目指してみませんか？

私たち教育公務員にとって必要不可欠な日ごろの研修。これまで他の学校の先生方と意見交換などを行う場合は、あらかじめ日時を定めて、各々が会場まで足を運ぶ必要がありました。

週五日制の完全実施に伴い、授業日が減少する中で、基礎・基本の確実な定着が求められている今日、一時間一時間の授業は、より一層重みを増しています。このような状況において、出張等で学校を離れることは次第に難しくなってきました。

「もっと研修を積み、指導力を磨きたい。でも、日ごろの授業は空けたくはない…」そんな多くの教員の声を受け、情報化推進研究チームでは本年度「教員ネットワーク」の研究に取り組んでいます。

1 教員ネットワークとは？

県内の小・中・高・盲・聾・養護学校の高速インターネット回線¹⁾接続率は80%を超えて²⁾います。また多くの教員が家庭でもインターネットを利用してしています。

情報化推進研究チームでは、この整ったインフラをより効果的に活用するために、教育センターWebサイト上に研究協議が行えるシステム(掲示板)を設けました。研究に参加している教員は、このインターネット上の掲示板を利用することで、都合のよい時間に、都合のよい場所から研究成果を発表したり、意見を述べたりできるようになっています。

また、こうした研究協議の結果得られた成果は、教育センターWebサイトで随時公開し、教員が授業づくりに役立てることができるようになりたいと考えています。

10月1日現在、「算数科教員ネットワーク」

(代表：福島市立森合小学校：穴戸与一教諭)と、「理科教員ネットワーク」(代表：福島市立岡山小学校：山本巖教諭)の2つの研究団体に、Webサイトの構築・運営やデジタルコンテンツ³⁾の作製などのお手伝いを行っています。

2 算数科教員ネットワーク

>>>算数科教員ネットワークの活動内容	>>>福島県の算数科研究
研究協議ネットワーク ○算数教員ネットワークについて 福島県広域の算数科を担当する教員のネットワークを構築します。徐々に、参加者を拡大してまいります。(代表：森合小、穴戸教諭) → ネットワーク参加決定 ○教員ネットワーク参加者(限定) ・教員ネットワーク参加希望者(限定) ・教員ネットワーク意見交換BBS(限定) ・参加者の研究内容(現在会員限定) 森合小 穴戸先生 →意見書込 小岡小 滝川先生 →意見書込 ・単位量あたりの大きさ 二本松北小 茂木先生 →意見書込 鹿小 土屋先生 →意見書込 茨山小 滝川先生 →意見書込 龍谷小 伊東先生 →意見書込 白河一小 仁科先生 →意見書込 伊藤二小 幸田先生 →意見書込 山都三小 山根先生 →意見書込 ・垂直と平行/四角形(作図)(柱式) 高柳三小 完形先生 →意見書込 口泉小 岩瀬先生 →意見書込 中一小 横山先生 →意見書込 福島北小 日下先生 →意見書込 教員ネットワークの若かり 富岡二小 高野先生 →意見書込 高坂小 菅野先生 →意見書込 十二小 加藤先生 →意見書込	○小学校教育研究会各地区の取り組み 福島地区 1 福島地区推進計画 2 1次研の話し合いの様子 3 1次研詳細(医学系)(中学生)(高学年) 伊達地区 1 推進計画 2 研究テーマ 3 1次研の内容 「垂直・平行(四角形)」「変わり方をみやすく」 「単位量あたりの大きさ」 4 2次研の内容 安達地区 1 年間研究計画 2 第1次研究協議会計書 3 1次研の話し合いの様子 郡山地区 1 1次研の内容 「単位量あたりの大きさ」 石川地区 1 事業計画 2 研究計画 田村地区 1 田村地区研究計画 2 1次研究資料 「単位量あたりの大きさ」 西白河地区

<http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/3kenHP/sansu/index.html>

繰り返しによって計算力が高まり、毎日が「できた、わかった」の連続となる授業。難問に頭をひねりながら「こうやったら？これでは？」と子ども自らが考える授業。「この面積の求め方は僕が発見したんだよ!」と子どもが自信を持つ授業。すべての教員はこのような「理想とする授業」を目指していますが、その姿は千差万別です。

算数科教員ネットワークでは、Webサイト上の掲示板を通して「理想的な算数の授業」の姿を語り合ったり、会員相互の授業論について相互評価を行ったりしています。また県内の先生方の授業づくりの参考になるよう、会員一人一人の研究成果を公開しています。

手軽に準備できる 家庭科の実践的・体験的学習

教科教育チーム 指導主事 黒川佳子

小学校、中学校の教科目標・分野目標には「実践的・体験的な(学習)活動を通して」と明記され、また、高校では目標の解説中で「実践的・体験的な学習を中心としている」と示されているように、「実践的・体験的学習」が重視されている。しかし、時間数の削減等により、時間のかかる実験・実習等を授業の中に取り入れることは困難な状況にある。そこで、短時間で実施でき、また費用もあまりかからない実験・実習等についていくつか紹介をしたい。実践的・体験的学習を行うに当たっては、「実践的・体験的学習を通して身に付けるべき力は何か」を校種・各校ごとに明確にし、実践的・体験的学習自体が目的とならないよう学習の在り方を吟味する必要がある。

衣服のたんぱく質の汚れの検出

【ねらい(例)】着用された衣服の汚れの状態を知り、洗濯の必要性を考える。

【対象】主に小・中(小体育「保健」でも可)

1 材料、用具

ニンヒドリン、水、霧吹き、アイロン、着用した衣服、新聞紙、あて布など

※ ニンヒドリンは理科教材会社を通し薬品会社より購入すると25gで3,000円程度(50回以上実験可能)。危険性はないが、刺激臭があるので換気をする。またたんぱく質と反応し紫色になるので、手袋をはめて取り扱う。

2 手順

① 少量のニンヒドリンと水(溶けない場合はぬるま湯)を霧吹きに入れよく溶かす。(100mlの水に0.4g程度)

② 着用した衣服(シャツ、靴下、ハンカチなど)にニンヒドリン溶液を吹付ける。衣服の下(後ろ)には新聞紙を敷き、余分な溶液が飛び散らないように注意する。

③ アイロンで加熱する。あて布などをあてアイロン台に溶液が移らないようにする。



写真1 たんぱく質の汚れの検出 左:未着用 右:2時間着用後の靴下

④ たんぱく質(身体からの汚れ)が付着した部分が紫色に発色する。(写真1)

※ 使用した霧吹き等は水道で洗浄可能。

食品添加物による清涼飲料水づくり (オレンジ風味)

【ねらい(例)】食品添加物の働きを知る。

【対象】主に中・高

1 材料、用具

合成着色料(黄、赤)、酸味料(クエン酸)、着香料(オレンジエッセンス)、砂糖、計量カップ、はかり、コップ

※ 合成着色料5g100円～、酸味料450g約900円、着香料30g約300円いずれも食材店の製菓コーナーなどで入手可。

2 手順

① 水を350mlまたは500ml(缶やペットボトルの容量)準備し、合成着色料の黄、赤をごく少量溶かし、市販のオレンジ風味清涼飲料水と同じような色合いにする。

② クエン酸を水350mlの場合で小さじ1/2～1くらい、味をみながら少しずつ加え溶かす。エッセンスも3～4滴たらす。

③ 味をみながら砂糖を加え溶かす。クエン酸の量にもよるが、水350gに対し砂糖約40gで市販のオレンジ風味清涼飲料水に近い味となる。

※ 炭酸や他の着色料、着香料も利用可。

参考 「家庭科の実験・観察・実習指導集」開隆堂

シニア体験ゴーグルの製作とシニア体験【ねらい(例)】

ゴーグルを着装し、学校や住まい等の危険な場所、不便な場所を点検する。【中】
 高齢者の身体的特徴を理解しコミュニケーションの在り方を考える。【高】

1 材料、用具

厚紙(空き箱など)、クリアホルダー(黄)、ゴムひも、のり、はさみ、ホチキス、セロテープ

※ クリアホルダーは10枚で100円程度。1枚から20人分程度とれる。

2 手順

- ① 型紙を厚紙に貼り付け、実線どおりに切る。目の部分は切り抜き、ゴムとおし穴を千枚通しなどであける。
- ② 点線を折り、角になる4箇所をホチキスでとめ、ゴーグルの形にする。
- ③ クリアホルダーを適当な大きさに切り、目の部分にはる。
- ④ ゴムひもを頭の大きさにあわせて通す。

※ 老人性白内障及び視野狭窄の体

験用具であるが、あくまでもひとつの体験で、すべての高齢者が同じような身体の状態にあるわけではないことを理解させる必要がある。



写真2 簡単シニア体験ゴーグル

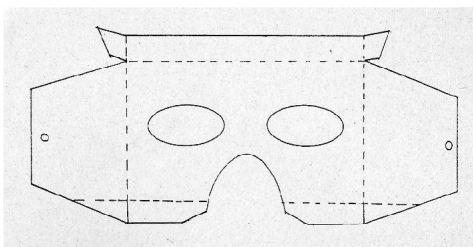


図1 型紙 400%拡大で実物大

参考 岡山県教育センター研究紀要第226号

手軽で丈夫な遊び道具の製作

【ねらい(例)】 遊び道具を製作し遊び方を工夫することにより、幼児の遊びの意義について考える。

【対象】 主に中

1 材料、用具

牛乳パック、画用紙、マジック、のり、はさみ

2 手順

- ① 牛乳パックを写真4のように切り開き、底を対角線で折る。
- ② 動物、人形、キャラクターなどを画用紙に牛乳パックの幅に合わせて描き、口の部分で切り離す。
- ③ 牛乳パックの底面の辺と型紙の口を、側面の辺と型紙の中心をあわせ、貼り付けてから型紙と牛乳パックを一緒に切る。

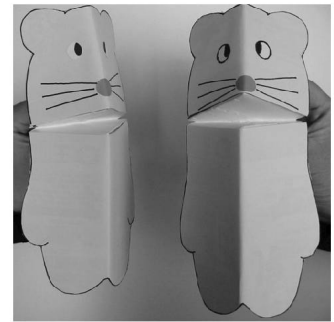


写真3 ばくばく口が動く簡単で丈夫な遊び道具



写真4 側面の対角となる辺(2箇所)を切り開き、底面を対角線で折る。

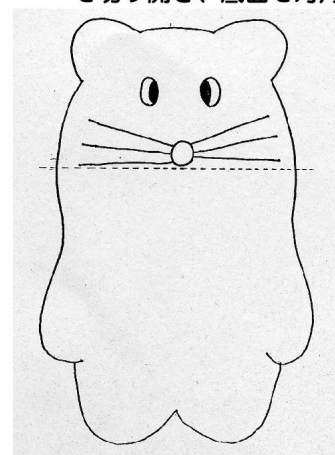


図2 型紙例 牛乳パックの幅×2以内の型紙を作り、口(点線)で切り離す。400%拡大で実物大

参考 広島市南保健センター web ページ
<http://www.city.hiroshima.jp/minami/kosodate/kosodate/kosodate.htm> 等

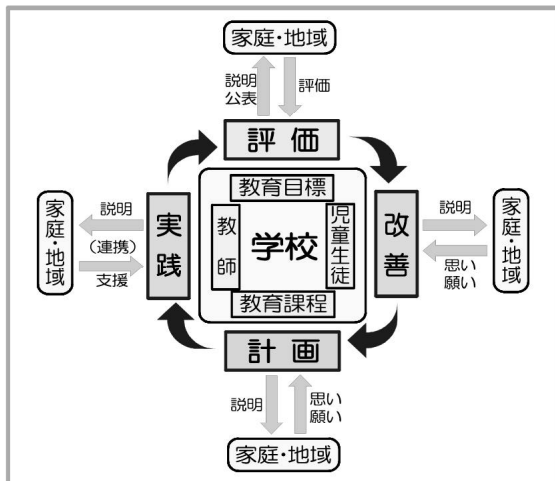
教科外
教育チーム

ビジョンに基づく 教育活動におけるPDCA

前回は、「組織的な取り組みは明確なビジョンから」と題して、お話をさせていただきました。学校経営ビジョンは船の航海でいえば海図にあたるもので、我が校のめざすゴールとそこに至る道筋を示すものであり、これこそが学校が組織として歩む道筋を方向付けるということを説明しました。

さて、今学校には、外部評価も含めた学校評価の積極的取り組みや、教職員評価の来年度からの本格的実施準備など、新しい事柄に対する主体的な対応が次々に求められています。しかし、これらの事柄は各々別々のことなのでしょう。決してそうではありません。

1 なぜ「学校評価」「教職員評価」なのか

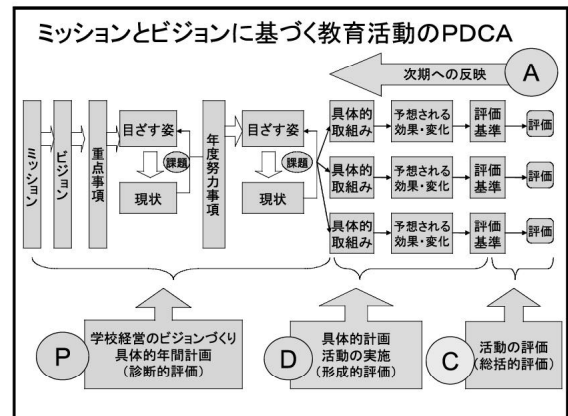


上の図に示したように学校の教育活動の営みは、計画—実践—評価—改善の繰り返しのよきなされています。学校としての計画の具体的実践の場面は、各学級の経営であり各教科等の授業そのものです。学校全体のビジョンを受けて日々の教育活動が推進されていて、その集約が

学校経営であると考えれば、相互に連鎖していくことは当然のことといえるでしょう。この意味からも、教師一人一人の教育活動は完全に独立したものとは言えません。

ところが、日々の授業や学級経営は、一人一人の先生方の創意工夫を生かしながら行われていますから、この意味では個人に任されている部分といえるでしょう。これはよいことでもありますが、過度の抱え込みや閉鎖性を招く要因にもなり得ることに注意を払わなければなりません。このようなことから、内外からの声に耳を傾けて改善につなげるために「学校評価」や「教職員評価」の取り組みが推進されていると考えることもできるでしょう。

2 職員のやる気を生む目標設定



学校全体のミッションやビジョンを受けて具体的取組みを進める上では、上の図のように学校全体のメンバーの思いを束ねて大きな力にし、各々の個性を生かしながら教育活動を推進すること、「構成員の教育活動のベクトルをそろえる」ことが大切になってきます。その際、節

目節目で管理職や同僚からのアドバイスを受けて改善を加えつつ、教育活動を推進することが大切です。

この「ベクトルをそろえる」際に必要なのが、教員一人一人のモチベーションをいかに高めるかということです。児童・生徒の学習において、課題を単純に与えただけでは意欲的に学習が進まないのと同様に、私たちが仕事に取り組む場合も、指示命令だけで設定された目標では、「やらされ仕事」「こなせばよい仕事」ということに陥ってしまいます。そういった懸念を払拭するため、次のような条件を念頭に、意欲を生む目標設定を工夫する必要があると言われていません。

- 努力すれば達成可能な適度な難度の目標
- 目標達成時のイメージの明確化
- 「今期確実に成果を上げる」といった目標の重点化（通常3～5個ぐらい）

これらの条件が有効に働くためには、学校の経営ビジョンや年度の重点などの目標設定の段階から、構成員一人一人が「自分自身の目標なのだ」と意識できるよう、主体的に関わるような場や機を工夫することが大切になるのです。「教職員評価」で言うところの個人の目標設定は、これらのことが大前提となって、つまり、学校全体で進むべき方向が共有化されて初めて実効あるものになるということを忘れてはなりません。ここでは、職員間の協働性が発揮され、互いに言うべきことは言いながら協力しあう関係性が大切になります。

3 ビジョンを受けての個人目標設定

このようにして学校全体でビジョンを共有して方向性が明らかになった段階で、各先生方の具体的な目標設定へと移っていきます。

何を目標項目にするか「What to do」を検

討するにあたり、まず、「学校の重点事項」「各分掌、学年、教科の重点事項」「子どもや保護者、地域の期待等」を把握し、それらを「私たちへの周囲からの期待」と受け止めましょう。そして、「自分の教員としての使命」や「自分の強みや、活用できそうな周囲の資源」に目を向けて自分自身の目標を設定します。

次に、目標達成に向けての具体的計画や段取り「How to do」を考えていきます。ここでは次のようなことに注意する必要があります。

- 目標項目のチェック
 - ・ テーマは明確か
 - ・ 他の人にもよくわかるか
 - ・ 一つの目標に複数の内容が入っていないか
- 目標の具体化を促す条件
 - ・ 達成された姿は明確か
 - ・ 達成のための手だてはあるか
 - ・ 期限やスケジュールは明らかか

「段取り八分」などといわれますが、この段階がクリアできれば、実践、評価、そして次の一手をめざす改善へとつながっていくことでしょう。もちろんこれは、個人レベルの改善ばかりではなく、学校の進むべき方向をより確かなものにする大きな改善へとつながるのです。

各学校では次年度の計画策定にさしかかる時期かと思いますが、ここで述べた事柄をこれまでの仕事とは別物として考えると、ますます「やらされ仕事」を増やすことになりかねません。ですから、これまでの表簿や仕事との関連を図ったり、集約・整理の工夫をしたりすることで、仕事の効率化を図り、実効あるものにすることが重要になるのです。

情報発信に伴う責任について

情報モラルの指導では「法律を守る態度を育成する」側面と「マナーや道徳性を育成する」側面があります。私たちは法律で規定された内容を児童生徒の発達段階に応じて正しく理解させ、だめなものはだめとしっかり守らせる態度を育成しなければなりません。また、ネットワーク上のコミュニケーションであっても人と人とのコミュニケーションであることを常に意識して、日常のモラルを適用していかなければなりません。

さて今回は、「情報発信に伴う責任」に関する内容について考えていきます。

〈事例1 電子掲示板上で発信する情報〉

Aさんが社会科の調べ学習をしている中で、お互いに質問をし合う掲示板がありました。そこを見ていると、同じクラスのBさんが質問を書いていた。Aさんはすぐに返事を書いてみました。すると、Bさんからも返事があり、教室の中で掲示板を使った会話が始まりました。その中で、AさんはCさんがD君に思いを寄せていることをつい書いてしまいました。

他のクラスでも、調べ学習の時間に同じ掲示板を見た子がたくさんいて、Cさんの思いが学校中に広まってしまいました。

〔事例の解説〕

ネットワーク上のコミュニケーションに慣れてくると、次第に他の人の存在を意識なくなり、日常の会話と同じような感覚でやり取りができてきます。そのため、周囲への配慮がなくなってしまうとこのような問題が起きてしまい

ます。

電子掲示板は、匿名性があり不特定多数の人との交流になるので、知らない人から誹謗や中傷を受けたり、また逆に、ほんの軽い気持ちで書き込んだことが、名誉毀損や脅迫といった罪に問われることもあります。

福島県警サイバー犯罪相談状況を見ると、今年度、名誉毀損・誹謗中傷に関するものが9月末現在、前年度と比べ3倍以上（17件→61件）に急増しています。

〔指導のポイント〕

- (1) 電子掲示板やメーリングリスト上で情報を発信するということは、大きな責任が伴うことを理解させることが大切です。手軽に情報を発信できる反面、大きな影響をもたらすという認識を持たせることが必要です。
- (2) 電子掲示板やメーリングリストには、悪口や人が嫌がることを書き込んではいけないことをしっかり教えます。パソコンや携帯電話で、電子掲示板等に投稿した内容によっては、名誉毀損、脅迫等の罪に問われることがあること、また、警察の捜査によっては必ず投稿者が特定でき、生涯を通して償い続けなければならない場合もあることを指導します。
- (3) トラブルになったときの対処法（保護者や教師に相談する、被害を受けたWebページを写真等で保存する、電子掲示板管理者に削除を依頼する）を知らせます。

〈事例2 電子メールで発信する情報〉

放課後、A君がコンピュータ室でBさんに電子メールを書いていた。ふと用事を思い出して、ほんの数分席を外した間

に、A君の友達が来て、そのメールの中身をB子さんを傷つける内容に書き換えて送信してしまいました。

それを受け取ったB子さんが、A君に抗議をしたところ、A君は強く否定しました。しかし、発信元の記録はA君になっていたため、いくら否定をしても信じてもらえません。

【事例の解説】

この事例のように、必ずしも発信者が加害者とは言えないこともあります。もっと悪質になると、設定を変え、他人になりすまして送信されたメールもあります。

このように、なりすましや無料メールの利用など、電子メールでの匿名性が高くなってくると、加害者が特定できにくだろうという安易な気持ちから、いたずらや誹謗中傷などのメールも多くなってくるといえます。

【指導のポイント】

- (1) 他人の名前や個人情報を勝手に使ってはいけないことは、インターネットを利用する時も当然のこととして指導します。このような行為は相手に不愉快な思いをさせるだけでなく、著しく信頼関係を損なう行為であることを指導します。
- (2) いたずらで行ったことでも、場合によっては電子掲示板同様、犯罪になりうることを指導します。
- (3) 不愉快なメールを受け取った時も感情的にならず、相手にその真意を確かめるなど冷静に対処し、自分で解決できないときは保護者や教師に相談することを指導します

インターネットは情報を簡単に受信したり発信したりできる反面、「仮面性」や「匿名性」を持っています。しかし現実の世界と異なる特別

な世界ではありません。現実の社会と同様に、人の心を傷つけることや犯罪行為は決して許されないのです。インターネットを利用する（電子掲示板・チャット・メール）ときには、情報発信に伴う責任を十分に自覚させ、相手の気持ちに十分配慮したコミュニケーションをさせましょう。

それでは、今回も最後に情報モラルクイズに挑戦してみましょう。(○か×でお答え下さい。)

- ① インターネット上でのコミュニケーションは、楽しくなければすぐやめられる手軽なものなので、実生活でのコミュニケーションよりも重視すべきである。
- ② 嫌な内容のメールが届いた。送信者を見ると友人のA君のメールアドレスだったので、A君にもう付き合わないと言った。
- ③ 面白そうな掲示板を見つけたので書き込もうと思ったが、何となく恥ずかしかかったので友人B君の名前で書き込んだ。
- ④ 生徒達が自分たちの活動の様子をいろいろな人に伝えたいと考え、学級のホームページに「私たちの活動」コーナーを設け、学習係が宿題を忘れた生徒の名前を書いた。
- ⑤ 友達から「○○という件名のメールを受け取っても絶対に開かないでください。パソコンが起動しなくなります。」というメールが届いた。ウィルス対策ソフトのホームページで本当かどうか確かめた。
- ⑥ あるブログに「自分が腹痛になったのはC魚屋で買った魚のせいかもしれない」という書き込みがあったので、友達に教えた。
- ⑦ 親友のD子さんから「このメールを5人に送信しないと受験に失敗する」という内容のメールが届いた。合格したいので、5人に転送した。

(×:④ `×:⑨
`○:⑤ `×:⑦ `×:⑧ `×:② `×:①) 判読機

教育相談の手法を取り入れたLHRでの「人間関係づくり」の取組み

～A高校での構成的グループエンカウンター実施に向けての取組み～

教育相談の手法を取り入れて授業を実施してみたいのだけれども、いま一步踏み出せないでいる先生方はいませんか？ 学校での課題解決のために、教育センターでの研修に参加し、その後、実際に教育相談の手法の一つである構成的グループエンカウンターを取り入れ、学年合同でLHRを行ったA高校での取組みを紹介します。

〈事例〉A高校2学年の課題

村田先生(1学年担任38歳男性)は、A高校に赴任して1年目を終えようとしています。A高校は、山間部にある全校生徒が400名程の学校です。この1年を通して、日頃、村田先生は、A高校の生徒について、「純朴で気持ちの優しい生徒が多い反面、自分に自信が持てず、人付き合いが苦手な生徒が多いなあ」と思っていました。また、就職後、早い時期に離職してしまう生徒が多いことも気にかけていました。

4月になって、村田先生は、学年持ち上がりで2学年の3組担任となりました。村田先生は、昨年度の経験をもとに、生徒指導上の課題解決を図るために自身の研修が必要であると感じていました。年度始めの職員会議で、教頭先生より、センター研修について話があり、ぜひこの機会に教育相談の講座を受講しようと考えました。村田先生が選んだのは、年間3回にわたって計画されている『学校教育相談実践講座』でした。

村田先生は、5月の連休明けのある日、進路指導室をふらっと訪れました。すると、進路指導部長の野田先生からこんな話を聞きました。

「村田先生、去年の卒業生の健一君と美佳さんが会社を辞めてしまったんだって」

村田先生は、学校行事や部活動を通して2人のことはよく覚えていました。野田先生に

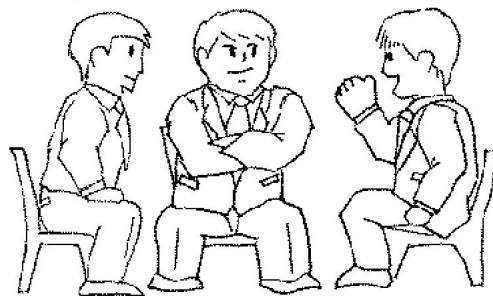
会社を辞めた理由を尋ねたところ、職場内での人間関係がうまくいかなかったとのことでした。

村田先生は、その頃、クラス内での人間関係がかなり固定化し、いくつかのグループに分かれ始めていることを危惧していました。何とかしなくてはという思いから、2学年会で各先生方にクラスの状況を尋ねてみることにしました。

1組担任の野地先生(40歳女性)からは、「どうも最近、いくつかのグループが出来ていて、その中で小さくまとまってしまっ…」

2組担任の地井先生(28歳男性)からは、「もっといろんな人と話したり関わったりしないとダメだぞと朝のSHRで言ったばかりなんですよ」

2学年の中では、学年全体で何か出来ることをしなくてはという共通の思いを持っていました。



6月中旬、村田先生は、学校教育相談実践講座前期の研修に参加しました。

〈課題解決にセンター研修を活かす〉

学校教育相談実践講座

村田先生が受講した学校教育相談実践講座は、生徒指導・教育相談の予防的・発達の側面と問題解決的側面の双方から、必要な理論と技術を習得し、実際の指導援助に役立てるために、多くの演習と講義で構成された実践的な内容の講座です。村田先生はこの研修で、集団を対象とした「人間関係づくり」の援助法である構成的グループエンカウンター（以下、SGE）を学びました。SGEのねらいは、内容や演習課題（以下、エクササイズ）、活動時間、グループサイズ等を参加者やねらいに合わせながら、集団学習体験を通して自己理解、他者理解等を促進させることにあります。

〈実施に向けてのチームづくり〉

1 実施チームの結成

今回の研修で村田先生は、SGEについて学び、ぜひ2学年全体で実施できないものかと思いました。そこで、学年の先生方にSGEについて話してみることにしました。すると、野地先生は、体験したことはないが、SGEについては聞いたことがあるということ、地井先生は、初任者研修の時に実際に体験したことがあるということが分かりました。いずれも、何かできることをしなくてはという思いを持っており、学年全体でとにかくやってみようということになりました。まずは、担任(3名)・副担任(2名)で実施チームを結成しました。

2 実施のためのリソース(資源)探し

村田先生をはじめ、実施チームのメンバーは研修会でSGEの体験はあるものの、自らリーダーとして実施したことはありませんでした。そこで、SGEを実施するにあたり、活用できる人的・物的リソース(資源)を探すことにしました。

3 校内の先生を活用する

生徒会担当の小野先生は、学校教育相談に関する研修や野外活動の研修でSGEを何度か体験したことがありました。実際に、生徒会役員の年度当初の顔合わせ合宿の際に実施し、その効果を実感していました。また、初任者の大野先生も夏休みの初任者研修で、SGEを通して先生方が徐々にうち解けていく過程を体験し、授業の中で活用できないものかと考えていました。2人の先生以外にも、SGEに関心を持っている先生が何人かいました。こういった先生方にも実施チームに参加してもらい、実施チームを拡大させていきました。

4 スクールカウンセラーを活用する

A高校には月2回、スクールカウンセラー(以下、SC)が来校していました。そこで、SCを活用する意味でもSGEのことについて尋ねてみることにしました。

5 県教育センターを活用する

村田先生は、教育センターでの研修の際に、「教育センターは、学校での教育活動を全面的に支援する」ということを知りました。そこで、SGEの実施にあたり、教育センターを活用してみようと考えました。結果として、教育センター所員と電話やメール等のやりとりをしながら、SGE実施にあたり、必要なノウハウや資料等の提供を受けることができました。

〈実施に向けての諸準備〉

1 課題を明確にする

実施チームのメンバーは、2学年の現状を話し合いました。話し合いでは、「人間関係が固定化していて、新たな人間関係が築きにくい生徒が増えているのではないか」といったことが話されました。

2 エクササイズを吟味する

実施チームのメンバーは、SGE を通して、生徒たちに人と関わる楽しさを実感してもらいたいという思いを持っていました。実施チームは、市販のエクササイズ集を検討したり、体験したエクササイズを持ち寄りしながらエクササイズを吟味しました。最終的に、生徒同士が所属クラスを超えて知り合い、互いの良さを理解することによって自己肯定感が高まるようなエクササイズを選びました。

3 教師自身が体験する

実施チームでは、学年外の先生方にも広く呼びかけ、村田先生がリーダーとなり、事前にエクササイズを体験してみることにしました。実技講習会の実施にあたっては、教育センター所員と連絡をとり合いながら準備を進めました。同時に、センター所員に当日の講習会への参加を依頼しました。

4 SGE 実施上の諸注意を確認する

SGE 体験の後、実施チームでは、教育センターの所員とともに実施上の諸注意を話し合いました。ここでは、以下の(1)～(4)が確認されました。

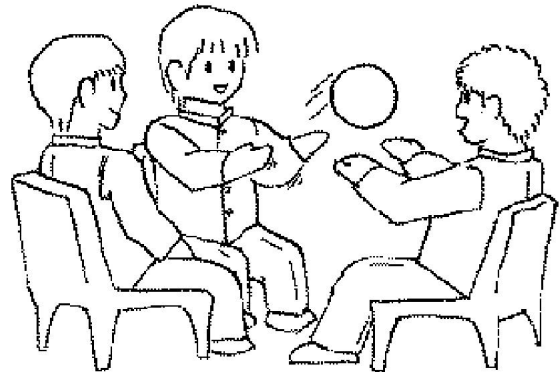
- (1) 各エクササイズでは「うまくやること」を第一の目的とせず、恥ずかしさや難しさを感じつつも生徒が相手のことを知ろう、自分のことを伝えようとする姿勢を大切にすること。
- (2) リーダー教師は、各エクササイズの説明や進行を行い、サブリーダー教師は、指示の分からない生徒への補足説明、恥ずかしがっている生徒への勇気づけ、脱線している生徒へのルールの再確認を行うこと。
- (3) 生徒を叱ってエクササイズを行わせるので

はなく、恥ずかしさや照れを受け止めつつ活動を支援すること。

- (4) エクササイズ後に、振り返りの時間を充分確保すること。

〈SGE を実施する〉

2 学年合同LHR は体育館を使って実施しました。村田先生がリーダーになり、全体進行、各エクササイズの説明、例示等を行いました。実施にあたっては、クラスの枠をはずし、事前に20名程度の班を5班作りしました。各班には、実施チームの教員がサブリーダーとして入り、適宜、ペア、グループ作りの調整を行い、エクササイズ中の生徒への目配りや支援を行いました。



〈実施後の教師の感想〉

村田先生：とにかく、第一歩を踏み出すことが大切だと思った。実施中は、生徒の活動の様子から失敗したかなと思う場面が多々あったが、振り返りの感想を見てみると、生徒達は予想以上に様々なことを考えながらエクササイズをしていたことに正直驚いた。1回実施してみると敷居が取れたというか、課題が明確になったというか、また実施してみたいといった気持ちがでてきた。

野地先生：実施まで正直苦労はあったが、今

終わってみると、なぜもっと早い時期にやらなかったのかという思いがある。今回初めて体験してみて、SHRなどのちょっとした時間でも自分のできる範囲で実施できそうな気がした。

地井先生：生徒達の感想を読んでいて、ああこんなことを感じていたんだといった発見がたくさんあった。実際に生徒たちが体験して気が付くことは、やはり心に残るのだろうし、良い体験ができたのではないかと思う。

小野先生：今回2学年のLHRに参加させてもらい、改めて、ねらいをどこに置くか、どんなグループ構成にするか、どんなエクササイズを選ぶかといった教師側の事前の準備の大切さを感じた。また、チームを組んでやれたのも心強く感じた。

大野先生：初任者研修で初めて体験したSGEを今回は生徒に対して実際に実施する立場から行えたことは、非常に勉強になった。教科の授業で使えば、授業の雰囲気も良くなり、学習に対する意欲が高まるのではないかと感じた。

〈実施後の生徒の感想〉

N子さん：友達の知らない部分を知ることができた。

K美さん：友達っていいなと思った。

F男くん：話したことの無い人と話げできた。

T子さん：ほめられると結構うれしかった。

M子さん：人と話すことは楽しいなと思った。

S子さん：自分が少し好きになれた気がした。

R子さん：普段言えないようなことが言えて良かった。

T男くん：みんなのいい所をたくさん発見した。

Y男くん：言葉をすぐに出せずに大変だった。

I子さん：恥ずかしくてあまりしゃべれなかった。

〈おわりに〉

今回は、教育相談の手法を取り入れて授業を実施してみたいと考えていても、いま一步踏み出せないでいる先生方を対象に、その一步を踏み出した、A高校2学年の事例を紹介しました。A高校の事例から、学校内・外の活用可能なリソース（資源）を探し、課題を明確にしてエクササイズを吟味していくことが、実施に向けて大切であることが分かります。また、実施後、生徒・教師双方に様々な気付きがあることも分かります。

● 教育相談の手法を取り入れたLHR（学級活動）に関心を持ったら……

成功も失敗もまずは初めの一步を踏み出すことから始まります。教育相談チームでは、その一步を踏み出すお手伝いをしています。お気軽にご相談ください。

今回、A高校が実施したSGEの詳細（指導案、授業展開例、生徒及び教師の感想、実施したエクササイズの進め方等）については、福島県教育センターのホームページ（<http://www.center.fks.ed.jp/>）上に『生きる力を育てる授業実践プログラム 高等学校編』「クラスを超えた人間関係づくり」として掲載されています。また、小・中学校においても同様のプログラムが掲載されていますのでご活用ください。ご不明な点は、教育相談チームまでお気軽にお問い合わせください。

〈参考文献〉

- 1) 生きる力を育てる授業実践プログラム
<http://www.center.fks.ed.jp/>
福島県教育センター教育相談チーム編
- 2) エンカウンターで学級が変わる 高等学校編
図書文化
- 3) エンカウタースキルアップ
図書文化
- 4) 構成的グループエンカウンター事典
図書文化

豊かな
教育実践



論理力を育てる

～論理力育成に関わるマトリックス の作成と授業の工夫～

福島市立蓬萊小学校 教諭 佐藤 志学
(平成16年度長期研究員)

平成16年度、教育センターの長期研究員として幅広く研修を積む機会を得た。とりわけ、国語科において実践的に取り組むことができた。ここでは、研修をベースにして平成16年度と平成17年度の2年間にわたって取り組んできた実践について述べてみる。

1 論理力育成の必要性

(1) 論理力について

まず表題にある論理力という言葉についてだが、いわゆる論理的思考力を意味する。これは、生涯にわたって豊かな人間関係を形成維持していくために不可欠な言語能力の基礎となる力とも深く関わる。近年多方面から注目されている言葉であり、関連する書籍も多数出版されている。このことから、本実践では論理力という言葉を使うこととした。

(2) 平成16年度の取組みの概要

論理的思考力と表現力の育成は、国語科における今日的課題として近年大きく叫ばれており、全国並びに本県の教育調査を通して、児童に身に付けさせなければならない課題として、その重要性が指摘されてきた。そこで平成16年度は、論理的育成に迫るために下記の研究主題を設定して取り組んだ。

「論理的思考力と表現力を高める指導～メタ認知能力を高め、意欲的に学ぶ児童を育てる国語科の指導～」

平成16年度は、小学校6年生の児童を対象に

説明文教材の読み取りと作成を通して、思考力と表現力の育成を目指した。同時に、認知心理学の側面を加味することで、学習意欲の向上を高めるための実践的な取組みを行った。

取組みの成果の一つとして、文章を吟味読みさせたり、論理的な構成の文章を書かせたりしたことで、児童の思考力と表現力の着実な高まりを見ることができた。

課題は、論理的思考力育成のための年間計画を作成し、どの単元でどのような力を育てるのかを明らかにし、計画的な実践をすること、そして、論理的思考力を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を通して育てていくための手立てを工夫することであった。

2 平成17年度の取組み

平成16年度の取組みの成果と課題を受けて、今年度は以下のような視点を持って実践に臨んだ。

(1) 育てたい6つの力

論理力を考えるときに、その力が多岐にわたることに気付く。学習指導要領解説の中でも指導内容の中に「筋道を立てて書くこと、論旨の一貫した表現を工夫すること、自分の考えを論理的に展開したり表現したりすること、論理を押しえながら自分の読み取り方ができること」など、論理力に関わる内容は、随所に示されている。しかし、「論理的」のとらえ方が多岐にわたるために、論理力を計画的に指導するために

は、論理力の内容を児童に身に付けたい力という観点から整理・統合するとよいのではないかと考え、論理力を以下の6つの力に分類することにした。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 理由付けができる力② 筋道を立てて報告できる力③ 筆者の論理を分析できる力④ 複数の視点に立って考える力⑤ 分かりやすく説明できる力⑥ 視点を明確にして物語を作る力 |
|---|

(2) 年間指導計画・マトリックスの作成

次に上記の6つの力を1年間を通して指導していくための年間指導計画を立てることにした。その際に、どの単元で、どのような論理力を育てるのかを明記したマトリックスを作成することにした。マトリックスには、次の項目を明記した。

- ① 単元名と指導時期
- ② 育てたい論理力
- ③ 論理力育成に関わる指導事項
- ④ 評価規準
- ⑤ 学習指導要領との関わり

(3) 指導の実際

《理由付けができる力を育てる授業例》

5年生の単元に、「自分の考えを伝えるスピーチをしよう」がある。単元の目標は、「自分の考えを聞き手に分かりやすく伝える工夫をして話したり、話し手の考えをとらえながら聞いたりする」ことである。そこで、まずこの単元で育てたい「論理力」を明確にした。

それが、「①理由付けができる力」である。すべての児童が、明確な理由付けをしながら、スピーチをすることで、児童の論理力を育てるこ

とを目指した。また、そのことを通して、単元の目標である「相手に分かりやすく伝えること」も達成したいと考えた。

【スピーチパターンの提示】

スピーチが、原稿の棒読みや単なる原稿の発表にならないようにするためには、スピーチの内容や組み立てを児童自身がしっかりと把握していなければならない。そこで、スピーチの組み立て方やつなぎ方を明らかにしたスピーチパターンを提示し、易しいスピーチから徐々に高度なスピーチへと段階を追って学習できるようにするために、ステップアップ式のスピーチパターンを提示し、練習の場を設けながら取り組ませた。

【ナンバリングの技法】

スピーチのテーマは、「自分が好きなもの（こと）の紹介」である。理由を明確にする際に、ナンバリングの技術を教え、理由の数を明らかにさせた。そのことで、より分かりやすいスピーチができるようにした。また、最終段階のスピーチでは、理由と例示を盛り込むことで、より説得力のあるスピーチを組み立てさせた。

3 おわりに

論理力を育てるための取組みの一端を紹介させていただいた。成果もまだまだ十分ではないが、年間を通して明確な視点を設定して実践することで、どの子にも着実に論理力を育てることを目標にして実践を継続している。

豊かな
教育実践



子どもたちが学級に満足し、 所属感を深めるために

原町市立原町第一小学校 教諭
村上 潤一
(平成16年度長期研究員)

I はじめに

福島県教育センターでの1年間の長期研修。学校での経験しかない私にとって、4月当初は、不安なことばかりでした。しかし、本音で話し合える研究室の仲間たち、小さな質問、相談にも親身になって答えてくれる諸先生方。そんな素晴らしいセンターの方々に囲まれ、1年間という長期間にわたり、自分でテーマを決め、研究に取り組むとことができたということは、私にとって、たいへん有意義な経験となりました。

II 1年間の研究を通して

不登校、いじめなど、学校現場で起きている様々な問題は、児童生徒同士の間関係の希薄さ、児童生徒のソーシャルスキルの不足などとの関連が大きいと考えられます。そこで、研究テーマを「集団の一員としての自覚を深めるための教育相談的手法の効果的な活用の在り方」とし、第5学年の3学級を対象に「心をつなぐ集団活動」を取り入れた授業実践を通して研究を行いました。また、様々な角度からの見地を広めるという意味で、教育相談に関する講座を中心に、たくさんの講座に参加させていただき、著名な先生方の講義や講演をお聴きすることができました。

1 所属感を深めるために意図したこと

「所属感」とは、「一人一人が集団の成員として満足感を持つとともに、集団の中で安定できる状態」ととらえました。学校生活の基盤となる学級という集団の中で、所属感を持って生活することができれば、子ども達にとって、学校が楽しく、より有意義な学びの場となることでしょう。

所属感を深めるためには、児童一人一人に友達と関わることの楽しさ、集団で物事に取り組むことのおもしろさなどを味わわせ、集団活動のよさや意義を体験的に学ばせていくことが大切です。今や、そのような場や機会を、教師が意図的に与えていかなければいけないと考えます。

2 教育相談的手法の活用とその効果

所属感とは、毎日の授業や行事など学校生活全体の中で、深まっていくものであると考えます。さらに、集団活動のよさや意義を体験的に学び、その深まりを促進するのに効果的であると思われるのが、教育相談的手法であると考えます。教育相談的手法とは、グループによる体験活動（実験的・試行的）を通し、人間関係づくりを核に自己の心的・行動的な面での成長を図る手法です。授業実践には、構成的グループエンカウンター（以下SGE）、ソーシャルスキルトレーニング（以下SST）の他、プロジェクトアドベンチャー（以下PA）やアサーショングループワークなどを取り入れました。その結果、子ども達は、それらの授業を通し、対人関係の在り方や友達と関わることの楽しさやよさを体感することができました。

3 学級集団アセスメント「Q-U」の活用

学級集団への満足度を把握し、学級への介入方針を明確にするために、たいへん有効だったのが川村茂雄氏（都留文科大学教授）の考案・開発した「Q-U（学級集団アセスメント）」です。12項目の質問を4件法で答えてもらい、その結果を座標上に表すことにより、短時間で「個人の心的内面」「学級集団の状態」を視覚的にとらえることができます。この結果をもとに、各学級に用いる教育相談的手法や授業内容を検

話し、学級の実態にあった授業を行うことで、効果的に学級への満足度を高めることができました。

Ⅲ 研究の成果を生かして

今年度は、昨年学んだことを、学級経営に生かしていきたいと考え、できる範囲で実践をしています。また、教師としての自分をさらに高めるために、積極的に研修会等に参加するように心がけています。

1 「ピーイング」を学級目標に生かす

今年度、5年生を担任するというので、児童一人一人に学級への思いを出し合わせ、学級目標をきめました。そして、その目標を、学級のマークと共に、一枚の白い布にかきました。この旗のようなものをPAでは「ピーイング」と言います。この「ピーイング」には、日々の生活の中で見られた、学級目標を達成するような具体的な行動を、マークの中に書かしていきようとしています。また、反対に学級目標を破るような言動は、マークの外に書き込みます。自分の願いをこめ、みんなで決めた学級目標を、常に意識させることにより集団の一員としての所属感を深めながら生活できるようにしています。



2 教育相談的手法の実践

昨年の授業実践から、人間関係づくりを行う上で、教育相談的手法が有効であるということを実感しました。そこで、本年度も教育センターの教育相談チームの「生きる力を育てる授業実践プログラム」の間接協力員として、教育相談的手法を取り入れた「学級開き」の授業を行いました。

また、月に一度の席替えをした時が、グループのメンバーが替わり、新しい人間関係づくりのよい機会だと考え、SGEのショートエクササイズやPAのアクティビティーを取り入れ、楽しみながら、新しいグループのメンバーとの関

係作りができるようにしています。あまり知らなかった友達について知り合ったり、協力し合ったりする体験を通して、「このグループでも楽しくやっていける」という期待感を持つことのできる児童が多いようです。

6月には、Q-Uを実施し、その結果から捉えられる学級の実態をもとに、できる限り学級活動の時間に、教育相談的手法を取り入れながら、授業実践を重ねています。

3 自己研修の場

現任校では、教育相談の講座等で学んだことを生かして、生徒指導主事としての立場でインシデントプロセス法を用いた事例研究会を進めたり、チーム支援についての情報を先生方に提供したりしています。また、春先には、同市内の中学校からの依頼を受け、中学1年生の集団宿泊活動に招いて頂き、教育相談的手法を用いた人間関係づくりの演習をさせて頂きました。

さらに、自己研修の場として、MAP（宮城アドベンチャープログラム）研究会やPAJ（プロジェクトアドベンチャー・ジャパン）のトレーナーによる研修会などに参加し、様々なアクティビティーを体験したり、他県の教員の方や他の職種の方と共にアドベンチャー教育について意見の交流を行っています。



Ⅳ おわりに

昨年1年間の研修を通し、教育センター勤務ならではの様々な体験をすることができました。多くの先生方との出会いと、たくさんの体験を通し、教師として、そして、一人の人間としての視野がとても広がったように思います。また、教師として、これから自分が大切にしていきたいこともはっきりしてきました。今後は、一年間で得た学びをさらにふくらませ、自分の力としていけるように、さらに、学校組織の一員として自分の役割を自覚し、役立てていけるように頑張っていきたいと思います。



中学校社会科歴史的分野において、 思考力・表現力を育てる授業の工夫

～日常の授業に討論を取り入れた学習活動を通して～

棚倉町立棚倉中学校 教諭 根本 顕 治

(平成16年度長期研究員)

I 昨年度の研究実践から

1 研究の趣旨

歴史的分野の学習で大切なことは、歴史的事象をそのままとらえることではなく、自分なりの価値判断で考えることを通して知識として身に付けることである。そのような学習活動を通して、将来社会的事象に対する確に思考・判断できる力が育つと考える。さらに、社会科の学習指導要領では思考判断力のほかに、表現力の育成を重視することが付け加えられた。

そのような思考力・表現力を育てる手だてとして、学習活動の中に討論活動を導入することが適切ではないかと考えた。討論活動とは、自分の意見を発表し、意見を交流させ練り上げることである。その活動を日常の授業で繰り返し実践することを通して、それらの力が育成できると考え、本研究主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 研究仮説

身近で切実感のある課題を設定し、その解決に向け自ら学習した知識をもとに、様々な意見を参考にしながら自分の考えを表現する討論活動を実践すれば、社会的事象に対しての多面的・多角的な思考力や、豊かな表現力が育つであろう。

(2) 研究方法

歴史的分野の指導、討論活動、豊かな表現力についての研究を進め、事前調査を実施した。その実態をふまえ、討論活動を取り入れた検証授業を現任校で行った。そして、その授業結果や事後調査から仮説の検証を行い、成果と課題を総括した。

3 研究のまとめ

昨年度の研究実践の結果、以下のような成果があげられた。

(1) 授業の様子やノートを振り返ると、身近で

切実感のある討論課題を設定したことで、生徒の関心意欲を高めることができた。

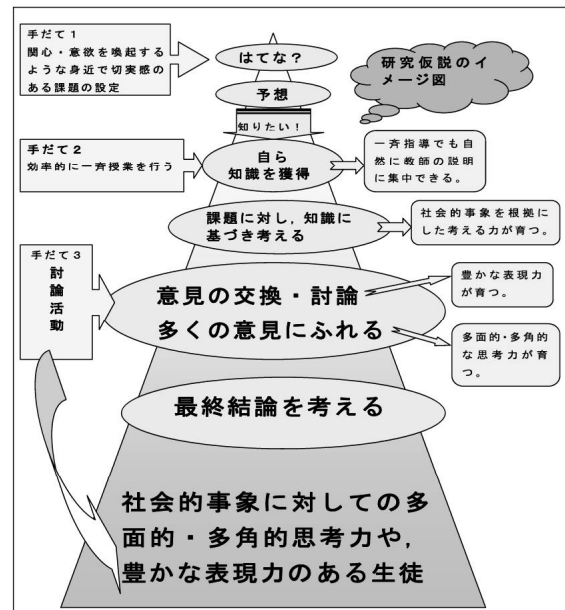
→「考えてみたい」と思わせるよう討論課題を吟味することが非常に大切！

(2) 討論活動を取り入れ、多くの意見にふれたことで、自分の考えを様々な面から客観的に見直すとともに、他の意見を参考に構築するなど、多面的・多角的な思考力を身に付けた生徒が多かった。

→このような力を身に付けさせることが、これから社会科教師に求められると考える。

(3) 事前に発表の仕方などを、具体的に指導してから授業の中に討論を取り入れた。その後、単元を通して繰り返し実践したことで、生徒に自分の意見を文章や話し言葉で、どう表現すればよいかという、基本的な表現の仕方が身に付いてきた。

→授業開きの時に思考法や表現法を徹底的に指導することが非常に重要になってくる。



Ⅱ 今年度の実践報告

前述した、昨年度の長期研究員としての研究をもとにして、今年度はさらに公民的分野においても討論活動を取り入れた実践を行っている。ここからはその実践例を報告する。

1 2年歴史的分野での実践

- (1) 単元名 欧米の進出と日本の開国
- (2) 授業のねらい

この単元の目標として、学習指導要領では「市民革命や産業革命を経た欧米諸国のアジアへの進出を背景に、開国とその影響について考える」と述べられている。この目標を達成するために以下のような討論課題を設定し、討論活動を行った。

井伊直弼の判断は正しかったか？

- (3) 授業の実際
 - ◎ 条約拒否派の意見
 - A：天皇や当時の政府の多数派の意見を無視するような行動は独裁政治である。
 - B：この条約で認めた領事裁判権や関税自主権の不保持は長年日本を苦しめたではないか。
 - C：開国して日本の経済は生糸は品不足になり、物価は上昇し国民は困ったではないか。
 - ◎ 条約容認派の意見
 - D：条約を認めなければ、アメリカの強力な軍隊と戦争になってしまう。
 - E：一時的に日本には厳しい条約であったとしても、植民地になるよりはましではないか。
 - F：最高権力者が正しいと決めたことは、たとえ反対が多くても、断行すべきである。

- (4) 授業の考察

以上のような意見を見ても、事象に対して多面的・多角的に自分の考えを形成していることがわかる。またどの意見も、歴史的事象に基づいたものであり、この活動によってそれらの事象が確かな学力となっていると考える。さらに学習指導要領のねらい「開国とその影響について考える」についても、ほとんどの生徒が達成できたものとする。

2 3年公民的分野での実践

- (1) 単元名 個人と社会生活
- (2) 授業のねらい 学習指導要領によれば、この単元のねらいは、「個人



授業風景：2年生

が社会とどのようにかかわりながら生活しているかを具体的に考えさせること」である。これは公民的分野の基礎的・基本的見方や考え方である。その目標を達成するために以下のような討論課題を設定し討論活動を行った。

校則は誰のために守るのか？

- (3) 授業の実際
 - ◎ 「自分のため」派の意見
 - A：自分が高校受験に失敗したり、周りから変な目で見られたりするから自分が損をする。
 - B：校則を守らなければ、先生から指導され、いやな気分になるから。
 - ◎ 「まわりのため」派の意見
 - C：誰かが校則違反しただけで、学校全体が悪いイメージで見られる。
 - D：人間は社会的存在なのだから、自分の行動は自分だけの責任ではない。
- (4) 授業の考察
 - 当初の生徒の意見では「自分のため」が多かったが、討論を進めていくうちに、「まわりのため」という意見が大勢を占めた。生徒はこの討論を通して「人間は社会的存在」である本質をつかみ、それによって、公民的な基礎的・基本的見方や考え方を身に付けることができた。

Ⅲ おわりに

どのクラスでも討論活動は盛り上がりを見せた。とかく討論活動といえば発展的なイメージがあるが、実践してみると、誰にでもでき、とても楽しい活動であることが実感でき、思考をまとめ、表現する能力を育成していく上で有効な手段の一つと考える。

豊かな
教育実践



作業的・体験的な学習を通して、地理的な 見方・考え方を育てる学習指導の在り方 ～身近な地域の調査において～

いわき市立小名浜第一中学校 教諭
山崎 浩之
(平成16年度長期研究員)

I 研究の趣旨

地理的分野では、「適切な課題を設けて行う学習」や「作業的・体験的な学習」などを取り入れながら、地理的な見方や考え方の基礎を培うことを今まで以上に重視している。

今までの教科指導を振り返ると、知識・理解の指導にウエートがかかりすぎたため、地理的な見方や考え方を十分に育てることができなかった。それらを育てていくためには、旧来の網羅的な学習スタイルから脱却し、自ら地域を追究し考察する学習を取り入れ、地域的特色をとらえさせることが必要ではないかと考える。

そこで、本研究では、「身近な地域の調査」を通して、生徒の主体的な学習を促し、地理的な見方・考え方を育成したいと考えた。

II 研究の概要

1 研究仮説

身近な地域の調査において、基礎・基本となる地理的な知識や技能の定着を図りながら、作業的・体験的な学習を取り入れた学習指導法を工夫すれば、地理的な見方・考え方の基礎が育つであろう。

2 研究計画

(1) 研究方法

事前調査（アンケート、地形図のテスト）の結果から生徒の実態をとらえ、地理的な見方・考え方の基礎を育てるための検証授業計画を作成し、それをもとに授業実践を行った。その後、事後調査や生徒の資料、まとめテストの結果などから、地理的な見方・考え方の基礎の育成に関する作業的・体験的な学習の有効性について検証した。

(2) 研究対象及び単元名

- 研究対象 中学校1年生 28名
- 単元名「身近な地域の調査」13時間

3 研究の実際

(1) 検証授業計画の作成

地理的な見方・考え方の基礎を育成するために、作業的・体験的な学習を位置づけ、次のような検証授業計画を作成した。

○ 検証授業計画の作成		自宅周辺の調査(夏休み)	
見方の基礎を育てるために	「身近な地域の調査」総時数13時間 1学年1組 28名	① 自宅周辺の地図づくり	検証授業1
		② 地形図のきまり	
		③ 新旧地形図の比較	検証授業2
		④ 予備調査の計画づくりと課題設定	検証授業3
考え方の基礎を育てるために		⑤～⑦ 追究計画立案と地域調査	検証授業4
		⑧～⑩ 地域調査のまとめと発表	
		⑪ 地域的特色のまとめ	

(2) 事前の調査活動(夏休みに実施)

自宅周辺の地域調査では、地域調査を行う視点として、事前に配付した「地域調査のマニュアル」と地図をもとに、生徒一人一人が自宅周辺のフィールドワークと聞き取り調査を行った。その結果を単元の導入に生かした。

(3) 授業実践

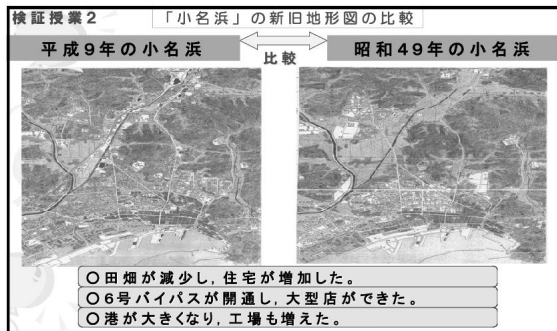
① 自宅周辺の地図づくり(検証授業1)

自宅周辺の地図づくりを通して、自分の地域の様子を知るとともに、他地域と比較し、その共通点や相違点を見出す授業を行った。

② 新旧地形図を比較する学習(検証授業2)

小名浜の新旧地形図の比較を通して、検証授業1での学習をさらに広げ、小名浜の諸事象をより広い視野からみる授業を展開した。

その結果、生徒は、「田畑が減少し、住宅が増加した」などをあげることができた。



③ 予備調査の計画づくりと課題設定（検証授業3）

予備調査の計画づくりを進めるために、「地域調査の手引」を活用させ、計画立案のポイントを示した。また、予備調査では、検証授業1・2を生かしながら、再度調査を行うことで地理的事象を見出し、課題を設定する授業を行った。

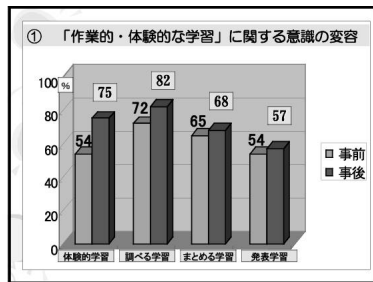
④ 追究計画立案と地域調査（検証授業4）

検証授業3で設定した課題を多面的・多角的に追究するために調べ学習や地域調査を行い、課題を解決する授業を行った。調査後には、地域調査のまとめを行うとともに、課題解決した発表を行わせ、地域的特色をとらえさせた。

(4) 考察

① 実践前後のアンケートによる「作業的・体験的な学習」に関する意識の変容

「作業的・体験的な学習」に関するアンケートを事前と事後で比較し、学習に関する意識の変容をみると、どの項目とも事後の方が高く、意識の高まりがみられた。



② 検証授業から見る生徒の様子

多くの生徒は、検証授業1から3を通して、事象をより広い視野からとらえ、地域的特色の理解につながる課題を設定することができた。また、検証授業4の学習を工夫し、地域調査によって課題を多面的・多角的に追究し、その要因をとらえることができた。このことから、作

業的・体験的な学習は、見方・考え方の基礎の育成に、ある程度有効に働いたと考える。しかし、十分にねらいを達成できない生徒もおり、指導方法の工夫が次単元の課題である。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 作業的・体験的な学習を取り入れた指導方法の工夫は、地理的な見方・考え方の基礎を育てる上で一定の効果をもたらしたといえる。
- 今回の学習では作業的・体験的な学習を取り入れたことにより、生徒が主体的に学習する姿が見られ生活する地域への理解と関心を深めることができたと考えられる。

2 課題

- 生徒がよりよい課題を設定し、その解決を図る支援をどのように行っていくかという課題があげられる。その方策としては、「地域調査の手引」の改善が考えられる。
- 次單元との系統性をとらえ、見方・考え方の基礎の育成につながる作業的・体験的な学習をどのように工夫していくかが課題である。それは、地域の規模が異なることから、主題図や統計資料の活用を工夫することが大切であると考える。

Ⅳ おわりに

平成16年度の長期研究員として、教育センターで学んだことは、今後の教師としての自分の在り方や生き方を考える上でとても貴重な時間となりました。現在は、3年生担任として、日々の授業や子どもたちとの生活に追われている毎日であります。今後は、恵まれた貴重な時間をいただいたことに報いるよう勉強し、努力して参りたいと思います。

〈参考文献〉

- 1) 中学校新地理学習の方向と展開 澁澤文隆著 (明治図書 2001年)
- 2) 身近な地域を調べる 竹内裕一・加賀美雅弘著 (古今書院 2003年)

実践に役立つ教育資料

—最近の研究紀要・資料から—

今回は、教育センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

学校運営の改善に向けた教員等の研修の在り方に関する調査研究報告書

学校運営改善調査研究会(2005年3月)

自助努力で開かれた学校づくりや自律的学校運営づくりを志向・推進し、一定の成果をあげている「有効な学校運営」の事例を全国の小学校、中学校、高等学校から収集して調査分析し、学校運営の事例集としてまとめられています。また、学校運営を有効に機能させるのに必要な、管理職やミドルリーダーの意識改革や組織マネジメント能力の育成・向上を図る研修プログラム開発の視点が示されています。

平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査結果の概要及び教科別分析

国立教育政策研究所教育課程研究センター(2005年9月)

小・中学校の学習指導要領に基づく教育課程の実施状況について、学習指導要領における各教科の目標や内容に照らした学習の実現状況の把握を通して調査研究し、指導上の問題点等を明らかにして、教育課程の基準の改善や指導方法等の改善に資する資料となっています。

学習内容と日常生活との関連性の研究

—学習内容と日常生活、産業・社会・人間とに関連した題材の開発—

国立教育政策研究所日常生活教材作成研究会(2005年3月)

児童生徒の学習意欲の向上を図るため、学習内容と日常生活との関連性を明らかにすることを目的とし、日常生活、産業(製品・技術)・社会(職業)・人間と関連した題材・教材の開発が行われています。

知的障害教育における自立活動に関する研究—自立活動の指導内容事例集—

大阪府教育センター(2005年3月)

実際の指導に役立つ63事例と自立活動におけるアセスメントの方法等を盛り込み、自立活動における5つの指導内容区分について解説を入れる等の工夫が図られています。

※ ここで紹介した以外にも多くの研究紀要や教育資料がありますので、ぜひご活用下さい。

平成17年度

福島県教育研究発表大会・第1次案内

□趣 旨

福島県内の公立義務教育諸学校及び県立学校における教員のすぐれた研究に対し、発表の機会を設けるとともに、福島県教育センターの研究成果を発表し、本県学校教育の向上に資する。

□主 催

福島県教育センター

□後 援

福島県小学校長会
福島県中学校長会
福島県高等学校長協会



□期 日

平成18年2月10日（金）

□会 場

福島県文化センター

1会場での実施！
移動はありません！

□講 演

講師 樋口裕一氏
(作家、作文・小論文の専門塾「白藍塾」主宰)
演題 「学校教育における話し方・書き方」

ベストセラー「頭がいい人、悪い人の話し方」の著者です。ご期待ください。

□研究発表

◇全体会発表
2つの研究を発表します！

◇分科会発表〈聴きたい発表を思いのままに！〉
4つの分科会で、5つの研究を発表します！



1つ1つの発表ごとの移動が可能です！

□日 程（予定）

9:15	
	受付
9:35	
	開会行事
9:50	
	全体会
	①研究論文入選論文 ②教育センター調査研究内容
10:40	
	休憩
11:00	
	講演会
12:00	
	昼食・移動
12:45	
	分科会
	第1分科会 小学校の部 第2分科会 中学校・高等学校の部 第3分科会 教育相談・生徒指導の部 第4分科会 校種共通の部
15:40	
	閉会